

義

佐賀藩第三代藩主

鍋島綱茂の文芸

―『観頤莊記』を読む―

中尾 友香梨

拾

茂



佐賀大学地域学歴史文化研究センター



『観頤荘記』表紙



『観頤荘記』本編の口絵





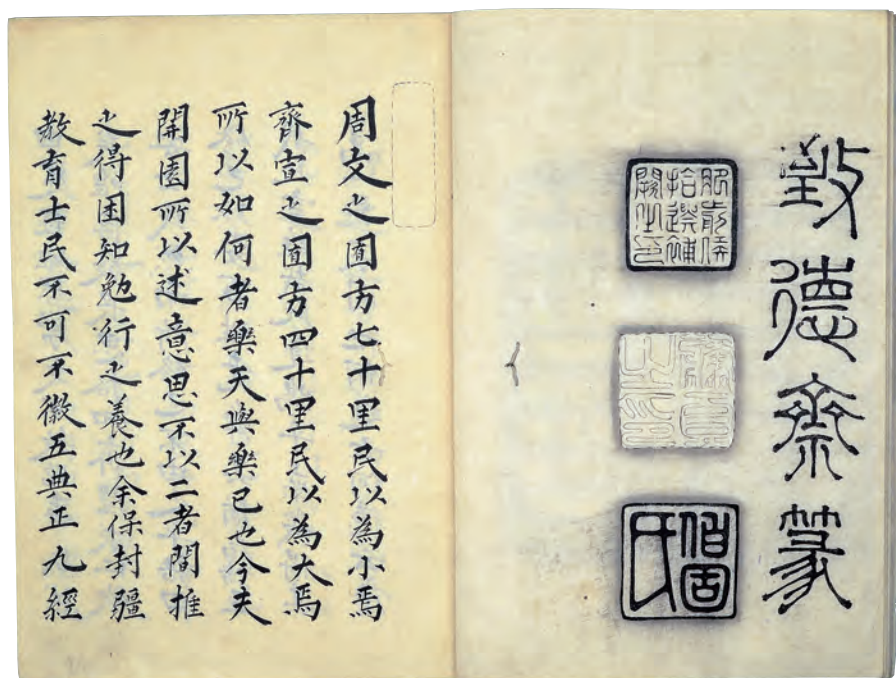
觀頤莊圖（全景）







『観頤荘記』本編の題字



『観頤荘記』本編の題字落款と本文冒頭

佐賀藩第三代藩主

鍋島綱茂の文芸

— 『観頤荘記』を読む



目次

|       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 現代語訳編 | 訓読編   | 翻字編   | 凡例    | 解題    |
| ..... | ..... | ..... | ..... | ..... |
| 43    | 23    | 11    | 9     | 1     |





## 解題

中尾 友香梨

### ①『観頤荘記』の伝本

『かんいどうき観頤荘記』は肥前佐賀藩第三代藩主・鍋島綱茂の手になるものである。綱茂は慶安五年（一六五二）五月五日に江戸桜田藩邸で生まれ、宝永三年（一七〇六）十二月二日に没した。享年五十五。幼名は彦法師丸、致徳斎・休復・松柏堂・活水・静観堂・適和などと号した。第二代藩主・鍋島光茂の子である。寛文元年（一六六一）十歳の時に将軍家綱に初目見し、同七年（一六六七）に元服、元禄八年（一六九五）に父光茂が隠居したため、家督を継ぎ襲封を認められた。儒学に造詣が深く、詩文を嗜んだが、まとまった著作は『観頤荘記』のみである。

綱茂自筆本の『観頤荘記』は残っていないが、二種類の転写本が公益財団法人鍋島報効会所蔵の鍋島家文庫に含まれており、寄託先の佐賀県立図書館にはそのマイクロ・フィルムも蔵されている。以下、説明の便宜上、二種類の転写本をそれぞれ甲本（請求記号 鍋〇八一／四七）・乙本（請求記号 鍋〇八一／三〇）と称する。

甲本と乙本はいずれも関防印や落款印が墨で模写されていたり、印枠のみ模写されて文字はなかったりしているので、綱茂の自筆本でないことは明らかである。なお甲本に記されている見せ消ちや補入字が、乙本ではいずれも文中に組み込まれており、そのため一行の文字数が他行より多く、不自然に詰めて書いてあるので、乙本は甲本をさらに転写したものと見られる。

ほかに、大正十四年の転写本が国文学研究資料館に蔵されており、同館の「所蔵和古書・マイクロ／デジタル目録データベース」に全冊の画像が公開されている。ただ、扉裏に「鍋島綱茂公自筆本により影写せしむ」と記されていることから、同データベースの「書誌注記」も「鍋島綱茂自筆本の写」としているが、実は朱の書き入れを含めて前掲の甲本をそっくりそのまま書き写したものであり、けっして綱茂自筆本の写しではない。

『観頤荘記』本文に関しては、『佐賀県教育史』第一巻資料編一（佐賀県教育委員会、一九八九年）に「勸学・督学資料」として翻刻されている。本文だけでもかなりの分量があるので、翻刻には大変な労力が費やされたはずであり、このような難業を成し遂げた先学には誠に頭が下がる。ただ少しばかり残念なことに、純粋に翻刻のみで訓点とは施されておらず、文の切り方も不充分であり、解説もきわめて

簡単なものしか附されていないので、これだけで『観頤莊記』の内容を理解するのはやはり難しい。しかも附録編の内容は翻刻されておらず、題字や口絵もすべて省略されている。

このような状況を鑑みて、本書では『観頤莊記』全冊を翻刻し、書き下し文と簡単な注釈、現代語訳をつけることによって、佐賀の先賢が残した貴重な資料を、研究者だけでなく一般の読者にも広く読んでもらうことを願う次第である。

翻刻の底本には、現存する伝本のうち成立が最も早いものと見られる甲本を用いた。まず鍋島家文庫にある二種類の転写本の書誌を左に記しておこう。

○甲本（請求記号 鍋〇八一／四七）

書型 大本一冊、二十六・三糎×十八・七糎。

装丁 袋綴じの四つ目綴じ。

表紙 濃紺色亀甲繫型押厚紙の三方折込表紙。

外題 左肩に短冊型元題簽。「観頤莊記」と墨書。

見返 なし。

構成 大きく前半（本編）と後半（附録編）に分けられ、それぞれ扉一丁、前遊紙一丁、口絵一枚、題字三丁、文（本編は

二十二丁、附録編は二十三丁）、後遊紙二丁で構成されている。

料紙 楮紙（並口）。

扉題 本編・附録編のそれぞれの扉の中央に「観頤莊記」と墨書。

口絵 本編・附録編にそれぞれ一枚ずつ口絵が具わっている。但し袋綴じではなく、少し大きめ（上部は継ぎ足し）の一枚紙を挿入して一緒に綴じており、上部と左側を折り曲げて収納するようになっている。紙質も本文料紙とは明らかに異なっている。本編の口絵の左上と附録編の口絵の右上に、それぞれ「頤上九日利／渉大川象曰／厲吉大有慶／也伝曰如伊／尹周公何嘗／不勤兢哉」、「易曰観頤貞／吉象曰観其／所養也天地／養万物聖人／養賢以及万／民頤之時大／矣哉」という賛が記されている。関防印と落款はなし。

題字 本編・附録編の巻頭にそれぞれ「観」「頤」「莊」「推」「義」、

「推」「義」「拾」「英」「編」という大きな題字が五字ずつ配されている。半丁に一字ずつ、計三丁。本編では冒頭に長方形の関防印が枠のみ模写され、文字は記されていない。



ないが、附録編では冒頭に同じ形の関防印が模写され、  
枠のみでなく「致徳斎」という白抜き文字まで模写され  
れている。落款に関しては、「致徳斎篆」という篆字とと  
もに「肥前侯／拾遺補／闕之印」（陽刻方印）、「藤貞／之  
印」（陽刻方印、白抜き文字）、「伯固／氏」（陽刻方印）三顆  
の落款印が墨で模写され、題字と印はすべて拓本風に文  
字または印の周りを墨で薄く塗って陰をつくり、文字を  
白抜きにして立体的に見せている。しかも本編の題字は  
木拓本風、附録編の題字は石拓本風に作っている。

序文  
なし。

目録  
なし。

内題  
なし。

丁付  
なし。

写式  
無辺無界、本編六行十三字前後、附録編行数字数不定。

漢文。句点・訓点等なし。楷書。附録編の注小字双行。

筆跡一筆。所々に朱筆の補入と補入符、見せ消ちあり。

印記  
本編の本文冒頭に長方形の関防印を思わせる点線の枠の  
みが記され、文字はなし。本編末尾にも三顆の方印を思  
わせる点線の枠のみが記され、文字はなし。その上から

題字の落款印と同じく「肥前侯／拾遺補／闕之印」（陽刻  
方印）、「藤貞／之印」（陽刻方印、白抜き文字）、「伯固／氏」  
（陽刻方印）と墨で模写された半透明の紙片が貼付されて  
いる。附録編の末尾には関防印と落款印のいずれもな  
し。

跋文  
本編・附録編の末尾にそれぞれ綱茂の自跋を転写してい  
る。

奥書  
なし。

識語  
なし。

蔵書印  
本編第三丁表、題字の関防印の枠にかかるように、「鍋島  
家蔵」（朱陽方印）。本編第二丁（前遊紙）表右下に「清陰  
所蔵」（朱陽長方印）。清陰は第十代藩主・鍋島直正の庶  
兄で、須古鍋島家を継いだ鍋島茂真（一八一三—一八六六）  
の号。

○乙本（請求記号 鍋〇八一／三〇）甲本と異なる部分を中心に記す。

書型  
大本一冊、二十六・五糎×横十八・五糎。

表紙  
浅縹色菊唐草型押厚紙の三方折込表紙、右上に「三番」  
と墨書。

外題 左肩に短冊型後題簽。「観頤莊記 完」と墨書。

構成 口絵なし。

料紙 楮紙（薄口）。

扉題 本編はなし。附録編は扉の中央に「観頤莊記」と墨書。

写式 甲本とほぼ同じ。ただ、甲本で補入、見せ消ちとされて

いた文字がすべて文中に組み込まれている。また、甲本は本編・附録編ともに末尾に綱茂の落款印が書き写されていないものの、乙本は附録編末尾に題字の落款印と同じ落款印が書き写されている。なお、跋文に一箇所、墨筆の見せ消ちがある。

蔵書印 なし。

裏表紙 短冊型付箋に「綱茂公御自作の記文」と墨書。

### ㊦ 綱茂と観頤荘

綱茂の生涯の事跡は、『綱茂公御年譜』（佐賀近世史料）第一編第三卷、佐賀県立図書館、一九九五年）に詳しく記されており、その随所に和歌・漢詩・画讀が鏤められているので、高い教養の持ち主であったことは容易に看取される。直茂・勝茂・光茂の年譜とは著しく異

なる側面でもある。そして年譜に引かれた『武林隱見録』には次のようにある。

綱茂公ハ天性ウツタカク、大祿ノ将ト見ヘサセラレ、才智双ヒナク、博学多聞ニシテ、諸芸ニ達セラル、誠ニ無双ノ侯伯ト皆人稱嘆セリト云々。

綱茂が博学で諸芸に通じ、才智無双の殿様として世人に称嘆されたところがあるが、実際に綱茂は幕府の学問を司っていた林家一門、殊に林鳳岡や人見竹洞と懇意にしており、鳳岡・竹洞の詩文集にもしばしばその名が見える。また、佐賀の歴代藩主の文武の嗜み等を記した『雨中の伽』（文化九年「一八二二」）には次のようにある。

勝茂公御代までは乱世の時代にて、儒臣もなく、沙門にのみ文章など書く人はありしならん。そのころ三間山円通寺瑞岩和尚杯、文字に達したるにてや有けむ。高伝寺釈迦御建立の記文など、此叟に仰ありて、書れしと見へたり。綱茂公学問を好せ給ひ、詩をも能し、書画にも達し給ひぬ。將軍綱吉公の御前にて輪講など遊しと也。鬼丸中小路に西御屋敷と号し、御別業御草創有て、丸御茶屋、三角御茶屋、百姓茶屋など、其外色々の御茶屋敷数多ありとぞ。額などあるは多くは長崎官梅道栄書たりとぞ。泉水飯山の広大いふばかりなしとなむ。石は多く摂州兵

庫なる粘右衛門に仰下されしとぞ。稲荷を厚く御信仰に依て、江戸烏森稲荷社を御勧請ありし也。聖堂も共に爰に始て建給ひ、春秋の積奠おこなわる、事も、此御時よりならむ。實松元琳其時よりの祭主にや知らず。岡本政之進などいへる儒者も此時分御抱也。

（堤主禮著『雨中の伽』の「文学」の項、中村幸彦ほか校訂『隨筆百花苑』第十五卷所収、中央公論社、一九八一年）

これによれば、勝茂の頃までは乱世の時代であつたので、佐賀藩では儒臣を召し抱えることはなく、文章などを書くのは主に僧侶であつたが、三代綱茂は学問を好み、詩や書画を能くし、將軍綱吉の前で輪講をすることもあつた。そして佐賀城の西、鬼丸の中小路（なかしゅうじ）に別荘を建てて、西御屋敷と号し、茶屋も数多く構えたとあるが、この西御屋敷こそが観願荘である。建物の扁額の多くは長崎の唐通事・林道栄（号は官梅）が書いたものであり、石は摂州兵庫から調達したものであるという。また稲荷を厚く信仰しながら、孔子を祭る聖堂（孔子廟）をも建て、春と秋の積奠（せきてん）（孔子を祭る儀式）をとりおこなうのも、綱茂の時代から始まつており、實松元琳や岡本政之進などの儒者をも召し抱えたという。儒学や文雅に対する綱茂の熱心さが読み取れる。

『観願荘記』にも驚くほど多くの漢詩文及び儒学經典の一、二句が随所に鏤められており、また中国の古典だけでなく、日本の和歌や『徒然草』なども一部踏まえているので、綱茂が並々ならぬ博識の持ち主であつたことは、この一冊だけを見てもよくわかる。『観願荘記』に引かれている漢詩文や儒学經典の文句については、若干の文字の異同があつたり、作者の名前を間違えていたりもするが、それは逆にいえば、彼がけつしてそれらのテキストを傍に置いて見ながら書き写したのではなく、ほぼすべて記憶に頼つて書いたことを意味するものでもある。稀に見る博覧強記の人物であつたといつても過言ではあるまい。

では、「観願」とは如何なる意味なのか。綱茂が自ら『観願荘記』に記しているように、これは儒学の經典の一つである『易経』に由来する言葉である。「願」とはもともと人間のおとがい、下顎を指す。易でいう「頤卦」の卦形は、上下に陽爻を一本ずつ配し、その間に陰爻を四本並べており（䷚）、それは人が口を開けた形に似ている。また上下卦の卦象を見れば、上は艮（止まり）、下は震（動く）であり、それは人間が物を食べる時の上下の顎のはたらきにも似ている。このようなことから、「頤」には「養う」という意味が派生した。したがつて「観頤」とは「養うところを観る」という意味であり、そ

れはもちろん単に身を養う飲食のことだけを指すのではなく、道をふみ行つて徳を養うことをもいう。

綱茂が広大な庭園を造営した大義名分もまさにここにある。「今、夫れ園を開きて、意を述ぶる所以は、二者（周の文王の園と斉の宣王の園）の間を以て之れを推さず、困知勉行の養を得んことを思えばなり」とし、その理由を「余封疆（国土）を保ち、士民（士と民）を教育せんには、五典を徴しとし、九經を正し、由りて極（根本の道徳）を建てざるべからず。然りと雖も文を学びて敏ならず、事に臨みて昏然たり」とした。つまり国土を守り、士と民を教え導くためには、倫理道徳の規範をしっかり定める必要がある、そのためにはまず藩主である自分の身を修めることから始めなければならないというのである。

そして観頤荘の造営は、このような自己修養のためのものであるというのが、少なくとも綱茂が『観頤荘記』に記した表向きの理由であり、それは『観頤荘記』の次の記述から読み取れる。

皆な是れ莊園の風物にして、以て生を養い、徳を養う所なり。何ぞ周文（周の文王）の園（園）に擬えんや。何ぞ齊宣（齊の宣王）の楽しみに由らんや。夫の頤の義を顧みれば、至れり、尽くせり。大なるを語れば、則ち天地育物の事なり。小なるを語

れば、則ち園囿養心の要なり。徳性を辨ずれば速やかに会得し、道の教えを辨ずれば敏にして既に行う。花木の理は、推して文質を觀るべし。禽鳥の声は、推して楽和を感ずべし。水流の不測は、推して含洪を知るべし。山岳の厚重は、推して仁寿を求むべし。此に於いて養生する所を得れば、則ち長に事うる所を得、長に事うる所を得れば、則ち民に恵む所を得。然らば則ち頤の義を論じること至ると雖も、頤を觀るに庶からんや。

『観頤荘記』本編のまとめとして最後の部分をかざるこの一段において、綱茂は庭園の中のすべての風物は、生を養い、徳を養うためのものであるとし、だから観頤荘を周の文王や斉の宣王の庭園と比べるまでの必要もなく、「頤」という一字にその意義はすでに充分示されているという。その意義とは庭園の中で心を養うことであり、具体的には花と草木の筋目に、外見の美と内面の実を見ることができ、鳥の鳴き声に、夫婦や兄弟が仲良く楽しむことの大切さを感じ取ることができ、水の流れの豊かさに、大きな徳を知ることができる、山岳の厚重さに、仁徳と長寿を求めることができる、ということである。またここで養生を得ることで、年長者に仕えることができ、年長者に仕えることで、民衆に恵みを施すことができる。したがってたとえ机上で「頤」の意義を論じ尽くしたとしても、それ



は「頤」を直接観ることには及ばない、というのが綱茂の結論である。

要するに、観頤荘の造営の目的は、庭園のさまざまな風物を観察することによって、天地が万物を育む「頤」を観、そこから物事の理を悟り、己の心を養い、己の心を修めて、その上で民に恵みを施し、国を治めるということであるが、それはつきつめれば「格物致知」と「修己治人」である。朱熹の解釈にしたがえば、「格物致知」とは、外在のあらゆる事物の理に至り尽くして知識を極め、客観的な理を獲得することが道德の基礎となるという意味。「修己治人」とは、我が身を修め、人を教化することである（ともに『大学章句』）。綱茂はこの観点に立つて、園内のさまざまな景物を観察し、そのことによって己の心を修め、士と民を教育し、国をうまく治めることを目指したのである。

しかし綱茂のこのような理想は、次世代に継がれることなく、綱茂没後間もなく観頤荘はさっそく一部が解体され、家臣に下賜された<sup>①</sup>。その原因としては、綱茂の文治主義に対する藩内の不評、親類筋の個人的感情の衝突、天災・火災等による経済的圧迫などが推測されるが、定かではない。これに関連する『葉隠』の記述を左に掲げよう（傍線部筆者）。

されば、憚りながら御上にも、日峯様・泰盛院様の御苦勞を思召し知られせめて御譲りの御書物なりと御熟覽候て、御落着き遊ばされ度き事に候。さるに御出生候へば、若殿々とひようすかし立て候に付て御苦勞なされ候事これ無く、国学御存じなく、我儘<sup>わがまま</sup>の好き事ばかりに候。されば御家職方<sup>かしやう</sup>、大方に候故、近年新儀多く、手薄く相成り申す事に候。斯様の時節に、小利口なる者共が、何の味も知らず、智慧自慢をして新儀を工み出し、殿の御氣に入り、出頭して悉く仕くさらかし申し候。まづ申さば、御三人の不熟の着座作り、他方者<sup>よそもの</sup>抱え、手明槍物頭組替、屋敷替、御親類並に家老作り御ひがし解除け、御控帳仕替、独礼作り、西御屋敷取立、足輕組まぜちらかし、御道具仕廻物、西御屋敷解崩しなど、皆御代初々に何事がなと新儀工みの、仕損<sup>そと</sup>ひにて候<sup>②</sup>。

『葉隠』の「夜陰の閑談」に収められたこの一段は、二代光茂・三代綱茂・四代吉茂の治世を批判する内容であるが、中に「西御屋敷取立」とあり、また「西御屋敷解崩し」とある。前述したようにこの西御屋敷こそが観頤荘であり、『葉隠』の口述者山本常朝<sup>つねとも</sup>は、観頤荘の建造もその解体もけっして好ましいものではないと見ている。

元禄十一年（一六九八）に造営が始まって、宝永四年（一七〇七）

に一部が解体されるまで、わずか九年と短命に終わった観願荘であつたが、網茂が残した『観願荘記』はその風雅な面影を現代のわれわれに伝えてくれる。

前述の公益財団法人鍋島報效会（徴古館）には、「観願荘図」も二種類保存されており、いずれも江戸後期に制作されたものと見られる。基本的に『観願荘記』の内容にもとづいて描かれているが、一部異なる内容もある。観願荘の全景を把握するには便利なので、参考にしていただきたく、口絵に掲載した。併せてご覧いただきたい。

【附記】本書に掲載した画像はすべて公益財団法人鍋島報效会（徴古館）よりご提供いただいたものである。なお同館からは、『観願荘記』の閲覧と翻刻、及び「観願荘図」の閲覧を許可していただいております。同館学芸員の富田紘次様には、調査の段階から甚大なご協力をいただき、貴重なご教示も数多く賜った。なお編集と出版に際しては、本学地域学歴史文化研究センターの伊藤昭弘先生と大同印刷に大変お世話になった。併せて衷心より感謝申し上げます。

## 【注】

(1) 『吉茂公譜』（『佐賀県近世史料』第一編第四卷、佐賀県立図書館、一九九六年）宝永四年（一七〇七年）二月晦日の条に、「西御屋敷内ヲ左ノ人数ヘ拝領サセラル」（三六頁）とあり、枝吉利左衛門をはじめとする家臣八人の名が記されている。

(2) 山本常朝述、田代陣基記『葉隠』第一卷、「夜陰の閑談」、三教書院、一九三七年、七頁。

## 凡 例

- 一 本書は肥前佐賀藩第三代藩主・鍋島綱茂の『観頤荘記』を翻字し、書き下し文と簡単な注釈、現代語訳を附すものである。
- 一 底本には公益財団法人鍋島報效会所蔵・佐賀県立図書館寄託（鍋島家文庫）『観頤荘記』（甲本、請求記号 鍋〇八一／四七）を用いた。
- 一 漢字は原則として新字体・通行の字体を用いたが、固有名詞など一部の文字に関しては底本の字体をそのまま用いたものもある。例えば「龍」「仝」など。また「弁」と「辨」、「余」と「餘」、「芸」と「藝」など、字体によって意味が異なるものは区別した。
- 一 底本に記されている朱筆の見せ消ちは、当該文字の上に取消線を引き、新しい文字を右脇に傍書して示した。例えば「城」<sup>域</sup>、「曲」<sup>由</sup>など。
- 一 底本に記されている朱筆の補入は、「。」で補入符を示し、その前後の文字の右脇に補入字を記した。例えば、  
取易  
「。所謂」<sup>主</sup>、「以南極為。」など。
- 一 明らかな誤字・当て字に関しては、右脇に「ママ」を付し、後に該当する文字を（ ）内に記した。
- 一 底本の割注は（ ）内に一行書きした。
- 一 編者が補った文字はすべて（ ）内に記した。
- 一 底本の行移りと丁移りは無視し、文意に従って適宜改行した。
- 一 翻字編には適宜句読点を附した。
- 一 書き下し文は現代仮名づかいにした。
- 一 書き下し文に適宜注釈を附したが、短いものは直接文中に（ ）付きで記し、若干説明を要するものに関しては注に載せた。
- 一 現代語訳は、逐語訳ではなく、読みやすさを考慮して意識にした。なお、内容を理解しやすくするため、原文にはない言葉を補ったところもある。





翻

字

編

## 「觀頤莊記」本編

【口繪賛】頤上九曰、利涉大川。象曰、厲吉、大有慶也。伝曰、如

伊尹、周公、何嘗不勤兢兢哉。

【題字】「觀頤莊推義」 致徳斎家

関防印（長方印と思わせる点線の枠のみが記され、文字はなし）

落款印

「肥前侯／拾遺補／闕之印」（陽刻方印、墨による模写）

「藤貞／之印」（陽刻方印、白抜き文字、墨による模写）

「伯固／氏」（陽刻方印、墨による模写）

周文之園、方七十里、民以為小焉。齊宣之園、方四十里、民以為大焉。所以如何者。樂天与楽己也。今夫開園、所以述意、思不以二者間推之、得困知勉行之養也。余保封疆、教育士民、不可不徵五典、正九經、由建極。雖然学文不敏、臨事昏然矣。唯存敬畏、思格知、齊礼求仁、欲安士民。

然而所修己、不由之乎。語曰、修己以安百姓、堯舜其猶病諸。至哉、此言。難哉、此道。嗚呼、庶幾得其万一施家園也。何道云。何徳云。庸所謂達道者、所共由而稟性於天也。達徳者、所同得而竭力

於己也。実思九經則帰一也。一者、仁也。仁者、性也。行仁者、力知也。知者、勇也。然則道也、徳也。力行而不学文者、失聖賢之法。而何知事理之当然乎。吾聞之、朱晦庵孜孜不已。是以暇日学文義、育此生、以存孝弟慈三者道民、則竭其力之端也乎。

於是城郭之西構別居、而号觀頤莊。取易所謂觀頤之義。伝曰、推養之

義、大至於天地養育万物、聖人養賢以及万民。与人之養生、養形、養徳、養人、皆頤養之道也。是其所由、而是其所養也。

園囿之間、遠邇之興。山嶂列西北、疇田連東南。而瞻望之則成吟、閑行之則成養。于時携文房之四友、欲鍾園林之衆奇、量之陶弘、虚然而不語、問諸陳玄、研磨而不応。偕言者、毛穎子也。

湛然池流、灩灩激激、青於藍、緑染指。徐仲車不来、其吟在此。因称灩藍池。彼臨暈岨、異株奇石璘璪璘蒼蒼。欧陽何有佳木秀繁陰也。

以題繁陰山。

於此以山水起衆興、尋仁智、属万春。毛穎以紀、楮国以載。越望山間、飛泉湧出。坡老所謂、擘開青玉峽、飛出兩白龍、其以此觀。則言玉飛龍、不宜哉。洲畔何有。有翠有陰、含四時合千歳。以為仙洲松也。百尺条陰合、千年蓋影披者、非李嶠之看乎。

漸下山、径繞水石、有第回小檻。称漣曳檻。鯉魚活潑、漣漪曳曳矣。有岡称鳳尾岡。枝葉青青者、鉄蕉也。或曰鳳尾蕉也。因以名之。

彼高岡乎、不鳴亦一奇也。

望水辺則枯葛屈盤、其形似逸龍之躍。以名濟旱木。蘇公有詩曰、遷作甘霖濟旱民、龍云龍云飛躍云乎。濟民之化、又庇寓于此。砌構閣、号含清閣。取謝靈運所謂山水含清暉之句。蒼蒼之影、潺潺之声、可以愛翫。左傍水涯、偶生芝草。煌<sup>煌</sup>。皤皤、而非群卉之類。嘗聞明世之瑞也。漢殿重荃、作芝房之歌。謝庭比玉、称子孫之秀。因名玉生芝。可以為祥、可以為慶。

過此閣、顧古<sup>マコ</sup>(右)則長架垂枝、藤花凝紫。一片紫氣、欲迎李老君。則香山有言、引蔓出林樹、垂綸覆巢鶴者、不指此紫英乎。以之賞蔓綸藤。臨水涯有小屋、号漱玉窩。陸士衡所謂、飛泉漱鳴玉者、是以可見矣。

天山鍾秀、晴霞靄靄。館址崇跡、蒼松鬱鬱。今津橫連長堤、遠帆拆地來去。龍門高攢綠萃、佳月分林升照。里外市廛、見茆簷之參差。野田疇濶、聞賓雁之嘹唳。砥川聳翠、夕陽相映。莊村連穗、農夫獲藏。是八景之梗概、而園外之四時也。觀物之理、推可知焉。

既過此窩、凝遠望、則深山鬱鬱、而鳥声嚶嚶。所謂黃鳥止于丘隅者乎。以名止鷺山。至善之地、在人不知。所以止之也。可以感觀矣。過小徑、南置一茶店。名歇涉店。佐輔曰、独訪山家歇還涉。來遊之客、到此由暫<sup>憩</sup>息也。東度長橋、有秀樓。号真意樓。仰見北嶂、俯

思南山、此間有真意、欲辨已忘言。乃取陶潛之意。樓辺当東、又結茅廬。名欲辨舍、以通真意樓。是吾欲辨佳趣之謂也。

楼上柱壁之間、往往以朽木枯葛代扁額。一曰見牛木。因其面相類、就見求仁之謂也。二曰蟠龍木。因其形相似、可以察變化。三曰常山靈。象首尾相救、可以論文理。四曰觀瀾葛。因其紋相齊、可以覺本末。五曰靈洞榿。因其中虛、可以察仙遊。事雖寓言、又非無所由也。

而四望則背岳抽北、積雪清眸。溫泉橫南、蒸煙凝望。多良霧斜、掩映于西南之間。西疇万頃、碁布綺分、稻梁連雲、感民事之勞。曲江四遶、如練如縠。長橋橫流、擬龍比虹。至若前池溶溶、朗月澄清。灣溪浚浚、桃花染浪。堆岩近砌、忽驚飛泉濺沫。沙場開衢、時見講馬半漢。春則花塢織錦、仮若蘭機。秋則楓樹飄紅、停杜牧車。層阜分徑、仙蹤心尋。野水泛舟、清淺欲渡。廬畔金井、不朽不濁。糸桧長垂、欲代短綆。惠山不遠、建溪在此。味芳賞茗、何不汲清乎。杏院隔郭、鳧鐘伝声。正卯西呂律之時、惜風花雪月之興。是則楼上之十五事、而園中之雅望也。六義之風、推可辨焉。

下此樓、引杖進屨、逍遙而經数程、北搆八仙堂。以南極為<sup>主</sup>。古曰、国家盛治、則南極見矣。祥風瑞霞、如躋仁寿之域。西有茅舍、扁曰蓬班。玉川子茶歌所謂、蓬萊山、在何処。嘗茶引客、為催班之場。彼見靈梅。如嶺如鳥、如扇如船。隨看異興、遂以釣詩。名釣詩梅。

胡澹庵所謂、一年佳處早梅時、勾引風情巧釣詩者、其在此乎。顧堤上、則稚松連翠、含月姿、帶煙格。眉山所詩、坐待雙龍蛇、清陰滿南階者、愛其稚松乎。以稱龍陰堤。期百尺、約千歲。

迴小徑、北有一廬。曰团香廬。茅宇团团、而庭石門戶亦然矣。明月之团乎、明珠之团乎。曰設龍鳳团也。梅聖俞曰、团香已入中都府。以府代廬、不又雅乎。

過此、路回境異。而別有一徑、入興慶野(墅)。效唐之興慶池、種牡丹數品。黃也紫也、入魏入姚。引天香、愛國色。因以名墅。粵有門、扁五柳門。看牡丹之艷麗、對楊柳之輕盈、則洛陽之榮、彭沢之風、一園易地、千歲同趣。無心雲起、有聲鳥歸。所以園日涉寓意也。

既而繞曲徑、困門牆、造建至聖殿。素宮城苑之內、二丁祭儀、厚薦蘋蘩。然以郭裏狹隘、遷尊殿於此。不敢園囿之觀、所以仰邦家之祥也。煥乎有文、嚴乎有威。由道門、声振門、稽首拜手而過。傍搆長廊、納倭漢之籍。漢庫名芸暉閣、倭庫号随扈府。翰墨神仙、道家蓬萊、觀千古於今日者乎。

過此、逍遙散步之間、有恢楠木之陰。枝葉繁鬱、傍之寄寓。号濃陰廬。嘗聞諸王穀滿地濃陰懶前去者、其在于此乎。

又入一境、有妙相堂。安置於普陀之像。顧厥境裏、當羅漢堂。是中華之石像也。非必崇異端、任民俗之仰敬也。書曰、天矜于民、民

所欲、天必從之。由之思、是亦自勸善懲惡之道也。

一步一顧、繞水涯、有高樓。名雲捧樓。取王平(介)甫之雲捧樓台出天上之句。四顧茫茫、眼界高豁。近望王子之瑞籬、仰神靈之和光。大槌連村、秀穗多秋。暘若雨若、農夫扑野。風煙靄靄、禾黍離離。指村於末次、引望於旦昏。八田凝眸、青松亭亭、無春無秋、見翠雲之連。舞鶴鳴和、欲繙毛詩。非九臯、在于南里。祥煙瑞霞、德善囿院、光被家國、庇護千秋。稻佐山遠、引雲帶煙。愛殘月之嬋娟、欲尋詩境之幽玄。瞻彼寺井、滄海渺茫、天晴則近人吟眸。蓬乎瀛乎、思茲在茲。遠帆何處、早津舟浮。西征東歸、來不稀。寄樓上之望、思蓬底之看。囊尾聳西、留夕陽之斜影、惜万景之熹微。朝旭熙熙、自遠自高。風雲變態、阿蘇噴(噴力)東。皆是遠邇壯觀、而景拾十一、興含千百。

漸下此樓、有徑有流。構竹園、育異域之奇獸。語曰、為司職吏、畜蕃息者、聖德之厚、益可感。因扁育之字、寓其愛心焉。

既去此、一水一橋、有亭号窺牆。亭以隣聖殿、欲窺數仞之牆。繞廊有玉鈎觀。仙宮雲箔捲、露出玉簾鈎者、虛全之謂也。以之名之。

傍築月榭。所以望朗月也。座傍披幌、書抱明榭之字。坡老所謂、抱明月之興、長觀于此者乎。又象月姿、画白兔、囿以桂樹。团欒之影、扶疎之陰。穿枝借吳剛之斧、隔戶窺蟾宮之象。嘗聞、翟乾祐以

水精為月、刻瑤為兔。神仙之跡、非無由也。翰墨之術、可以托焉。

此亭之園裏、設一鐘樓。非知漏刻之謂而已。古曰、君子鑠金為鐘、四時九乳。是以撞鐘、声調則君道得也。豈翹虛設也哉。於此誌銘併序曰、宇宙之造化、万物之動靜、唯在九乳響音之中。至若春來花馨、則想能因之山寺暮天、秋候月寒、則逮張說之春陵靜夜、以遊臨斯茶店、而聽呂刻律時之点籌不借人力以巧撞之。即是余保丹精、養丹心、而為慰遊人也。銘曰、鄭公抱德、晁氏製形、園囿千歲、長視長聽。繫歲是壬午之冬也。顧銘則不肖子也。

既而過林徑、有竹含風、非簫非瑟。尋賦於此君軒、称名於風簫檐。閑而雅也、雅而有音。茅廊緩回、竹檻長連。珍禽比棲、羽儀相映。素自異域伝来。有和鳴之扁額。今得異禽、幸而揭此軒。偶然而有和鳴之歛者也。又傍集扶桑之禽鳥、顏愛棲之字。以愛其棲之謂也。非公冶長、何通其語。非王子猷、何知其樂。

側有亭、呼代璋弄。其物彈丸之戲也。似戲有由。詩不言乎、男子生則弄璋。以比其德也。余有小姬。德教之道、不可隔也。代璋使弄之。德寿者天之所申也。可不思哉。

皆是莊園之風物、而所以養生、養德也。何擬周文之囿哉。何由齊宣之築哉。顧夫頤之義、至矣、尽矣。語大則天地育物之事也。語小則園囿養心之要也。辨德性速會得、辨道教敏既行。花木之理、可推

而觀文質。禽鳥之声、可推而感樂和。水流不測、可推而知含洪。山岳厚重、可推而求仁寿。於此得所養生、則得所事長、得所事長、則得所惠民。然則論頤之義雖至、庶于觀頤乎。遂以名莊居、自識。

元禄壬午仲冬之日

肥侯拾遺補闕藤貞伯固

致德齋主人撫景述言焉

印記 略（「解題」を参照）

## 「觀頤莊記」附録編

【口繪賛】易曰、觀頤、貞吉。彖曰、觀其所養也、天地養万物、聖

人養賢以及万民、頤之時大矣哉。

【題字】「推義拾英編」 致德齋篆

関防印「致德齋」（陽刻方印、白抜き文字、墨による模写）

落款印

「肥前侯／拾遺補／闕之印」（陽刻方印、墨による模写）

「藤貞／之印」（陽刻方印、白抜き文字、墨による模写）

「伯固／氏」（陽刻方印、墨による模写）



觀頤莊〔城西別莊名〕

易曰、觀頤。伝曰、推養之義、大至於天地養育万物、聖人養賢以及万民。与人之養生、養形、養德、皆頤養之道也。

灩藍池〔莊居之前池也〕

徐仲車詩、青於藍、綠染指、激激灩灩天尽頭。

繁陰山〔莊第之南山也〕

歐陽子亭記、佳木秀繁陰也。

玉飛龍〔繁陰山之岩畔有飛泉〕

東坡詩、擘開青玉峽、飛出兩白龍。

仙洲松〔繁陰山麓洲畔有松〕

綦母潜詩、仙郎偏好道、鑿沼〔象〕瀛洲。

止鷺山〔当繁陰山之東、相邀〕

詩曰、〔綿蛮〕黃鳥、止于丘隅。

漣曳檻〔繁陰山後、南存第。有池、鯉魚活澆。廻之以檻〕

杜甫詩、清漣曳水衣。

含清閣〔傍水涯、搆山畔〕

謝靈運詩、山水含清暉。

鳳尾岡〔当含清閣前、有岡、栽蘇鉄〕

潜確類書曰、鉄蕉、一曰鳳尾蕉。

涪旱木〔朽木類龍、以造脩之、令蟠于鳳尾岡之辺〕

東坡詩、遷作甘霖涪旱民。

玉生芝〔止鷺山之麓、今茲秋、靈芝初生、暉于水涯〕

謝安曰、子弟譬如芝蘭玉樹生於階庭。

蔓綸藤〔含清閣之西南、望紫於漱玉窩之間〕

白樂天詩、引蔓出林樹、垂綸覆巢鶴。

漱玉窩〔臨水涯築窩。窩中之瞻望、拾八景〕

陸士衡詩、飛泉漱鳴玉。

## 題壁八景

天山晴霞

当西北之間、有天山。霞晴則遠見孱顏、靄蒼蒼。因為奇觀。

館址蒼松

旧館之址、千株之松、崇崇蒼蒼、覽古視今。以為西阡之勝景。

龍門升月

龍門山当東、俗呼云宝琳院。佳月分翠陰、升林端。以為望月之美觀。

今津遠帆

今津西折、横連雲樹。隔岸遙見風帆之來去。

里外茅檐

西經数程、有里外市。望茅檐之参差、見商賈之來往。

野田竇雁

野田千疇、竇雁嘹唳。望村家、感秋風。

砥川夕陽

砥川山当西、翠屏雲開。夕陽影落、可以寄吟望。

莊村農夫

遠望西疇、有村称本莊。秀穗連雲、農夫獲藏。

歇涉店〔過漱玉窩、憩于真意樓之間〕

長孫佐輔詩曰、独訪山家歇還涉。

真意樓〔秀于莊居之東南〕

陶潛詩、山氣日夕佳、飛鳥相与歸。此間有真意、欲辨已忘言。

楼中葛木、号五珍、曰

見牛木

朽木。其面類牛、取見牛之仁術、以名之。

蟠龍木

朽木。其形似龍、以名之。

常山靈

枯葛。比常山之蛇也。

觀瀾葛

葛藟。貫綴而似波紋、以名焉。

靈洞榿

朽木。以空虛名之。

楼中題壁十五景

背岳積雪

背振山者、辨天之靈区也。冠冕衆山、光被九州。神威万祥、

積雪千秋。因瞻仰于此。

### 温泉蒸煙

温泉山者、南方之一奇觀。而靄煙如蒸、勢吞雲夢。万岳非無煙也。十手所指也。

### 多良翠霧

多良嶽、出于西南之間。崢嶸縹緲、而見遠霧於翠微之表耳。

### 曲江龍橋

園中有盤曲之江。長橋橫流、偃形如龍。往來之園客、無不由之。因以稱之。

### 平原花塢

花塢織錦、原野布綠。遊此境、則忘在園庭之裏、如出平原之外也。

### 前池澄月

池在莊居之前。水之清可鑑、月之澄忘弄。同氣相求之謂在于此。

### 灣溪桃花

灣溪繞園、桃花挾流。望翠靄入紅雲、以為一境之勝也。

### 堆岩飛泉

堆岩之際、飛泉湧出。瀝瀝泠泠、而噴玉分翠。騷客行人、憩留于此。

### 沙場講馬

園徑之傍、有一道之平沙。以為講馬之場。

### 層嶺仙徑

嶺回路轉、層翠送青。遊于此、則如出塵寰、尋仙蹤也。

### 迴岸楓樹

回岸皆楓也。莊園之一奇、而聊比楚岸之錦也。

### 西疇觀稼

園外蒼蒼者、禾稼也。望万頃之西疇、思民事之倦勞。不取其興、取其惠。題不忘也。

### 桜下金井

桜辺有井。其花垂糸、其水浮綠、兩般相映。以名之。

### 野渡泛舟

野水清淺、有渡有舟、泛然如待行客。以寓雅興。

### 杏院漏鐘

園外院遠、而聞漏鐘之聲、看雲樹之村。以惜其興、題焉。

### 欲辨舍

（真意樓傍之茅舍也）

陶潛詩、欲辨已忘言。

## 八仙堂

置八仙人之像。以南極為主。

蓬班〔八仙堂西境之小店也。以為園行待班之所〕

玉川茶歌、蓬萊山、在何處。

釣詩梅〔偃梅似船、橫于蓬班之傍〕

胡澹庵詩、一年佳處早梅時、勾引風情巧釣詩。

龍陰堤〔堤松並翠、在蓬班之前野〕

東坡詩、坐待雙龍蛇、清陰滿南階。

团香廬〔莊居之坤隅之野、築一廬。<sup>宇</sup>茅宇門戶团欒。以名之〕

梅聖俞茶詩、团香已入中都府。

興慶墅〔當觀頤莊之東南、隔門牆、開別墅〕

唐開元中、種牡丹於興慶池東、沈香亭前。今種牡丹、以名墅。

## 五柳門

植五株之柳、開徑、以設門於興慶墅、借陶潛門柳之旧名。

## 至聖殿

在興慶墅之中。別囿一場、有内外之重門。

## 声振門〔内門〕

孟子曰、孔子之謂集大成也者、金声而玉振也。

## 由道門〔外門〕

論語曰、誰能出不由戶、何莫由斯道也。

芸暉閣〔漢庫。構聖殿之後徑〕

杜陽編曰、元載造芸暉堂、用芸暉草塗壁。

随圻府〔倭庫。回長廊、通漢庫〕

古今序曰、随民之欲、圻士之才。

濃陰廬〔倚洪榎樹、設茅軒。涉園、憩于此〕

王穀詩、滿地濃陰懶前去。

## 妙相堂

安置于觀音之像。隔聖殿、有一境也。

## 羅漢堂

在妙相堂之傍。中華之石彫也。

雲捧樓〔森于觀頤莊之東南。扁十一景〕

王介甫詩、雲捧樓台出天上。

## 楼中之十一景題壁

### 王子瑞籬

楼前、隔數十弓、望王子宮於巽隅。昭瑞籬、長仰和光。

大樋扑農

南

大樋村当。近見農夫之耕、聞扑野之歛。

末次杳煙

南隔数程、有末次村。茅宇難分、望風煙之靄靄矣。

八田連松

八田村当巽、長堤連翠。見青松之亭亭、愛春秋之蒼蒼。

南里舞鶴

南里之邑、在東北之間。其地寬閑、而舞鶴相攸和鳴。以之為

佳境也。

德善靈森

德善院者、家國庇護之場也。且有神靈之瑞驗。以仰万秋、瞻

望靈森。

稻佐残月

稻佐山聳西。留残月、引暎雲。以添詩境之餘懷。

寺井晴滄

寺井当東南之間、天水一色也。雲晴則滄波渺茫、近入吟眸。

早津遠帆

早津与寺井相並異興。雲樹之間、遠指風帆、以為美觀。

藁尾夕照

藁尾山聳西。夕陽留影、山色入樓。

阿蘇朝暉

阿蘇山当東。遠指肥後、樓上引望、異地同興。翠煙暉暉、以

賓出日。

蕃育園

域

〔設竹園、育異域之珍獸、揭蕃育之額〕

語曰、為司職吏、畜蕃息。

窺牆亭

〔此亭以隣聖殿名之也〕

語曰、夫子之牆、數仞也。

鐘樓

〔在窺牆亭之園裏森鬱〕

玉鈎觀

〔廻廊通于窺牆亭〕

盧仝詩、仙宮雲箔捲、露出玉簾鈎。

抱明榭

〔玉鈎觀之傍、築月榭台。榭不設壁。故隸于鈎觀之西戶〕

赤壁賦、抱明月長終。

風簫檐

〔構窺牆亭之北面。又檐外有竹林〕

此君軒賦曰、有風動竹、聞簫瑟之聲、欣然忘食。

愛棲軒

〔屬風簫檐之傍。棲倭邦之禽鳥〕

劉長卿詩、主人庭中蔭喬木、愛此清陰欲棲宿。



蘇鳴〔愛異域之禽之堂也。故倣中華之家図、修造之。幸得唐製之額、有

和鳴之字、揭之稱之〕

劉斌詩、春林已自好、時鳥復和鳴。

代璋弄〔置夷狄遊翫之器〕

詩曰、男子生則弄之璋。此亭有自異域伝來彈丸。取弄璋之義代之、名焉。

窺經史之堆者、提其要焉。過園林之繁者、拾其芳焉。觀頤莊者、城西之別居也。園囿非大、台閣非美。愛山水而不止山水、玩花木而不偏花木。適心而吟、養心而觀。逍遙緩步之間、記成一軸。嗚呼、才探斗筭、詞纂瓦礫、如樗散之大、如荆棘之繁。卷而成堆、開而倦見、使讀者難過、使吟者不辨。於此拾品題、附小錄。冀得騷人韻士賞詠之、潤色之、助頤養於藝術、添歛聲於林泉也。

元禄壬午仲冬之日

肥侯拾遺補闕藤貞伯固

致德斎主人摘英自録

印記（なし）



訓

讀

編

## 「観頤莊記」本編

【口絵賛】頤<sup>(1)</sup>の上<sup>(2)</sup>九<sup>(3)</sup>に曰く、「大川<sup>(4)</sup>を渉<sup>(5)</sup>るに利<sup>(6)</sup>し」と。象<sup>(7)</sup>に曰く、

「厲<sup>(8)</sup>うけれども吉なり。大いに慶<sup>(9)</sup>びあるなり」と。伝<sup>(10)</sup>に

曰く、「伊尹<sup>(11)</sup>（殷の名宰相）・周公<sup>(12)</sup>（周公旦、周の執政）の

如きは、何ぞ嘗<sup>(13)</sup>て兢<sup>(14)</sup>み勤<sup>(15)</sup>めざらんや」と。

【題字】「観頤莊に義を推す」 致徳斎 篆す

印記 略（翻字編を参照）

周文<sup>(16)</sup>（周の文王）の圉<sup>(17)</sup>（御苑）は、方<sup>(18)</sup>（四方）七十<sup>(19)</sup>里なるも、民は

以て小と為す。齊宣<sup>(20)</sup>（齊の宣王）の圉は、方四十<sup>(21)</sup>里なるも、民は以て

大と為す。如何<sup>(22)</sup>なる所以<sup>(23)</sup>ぞ。天を樂しむと己を樂しむとなり。今、

夫<sup>(24)</sup>れ圉を開きて、意を述ぶる所以は、二者の間を以て之れを推さず、

困<sup>(25)</sup>知<sup>(26)</sup>勉<sup>(27)</sup>行<sup>(28)</sup>の養を得んことを思えはなり。余<sup>(29)</sup>封疆<sup>(30)</sup>（国土）を保ち、士

民<sup>(31)</sup>（士と民）を教育せんには、五典<sup>(32)</sup>を徹<sup>(33)</sup>しとし、九經<sup>(34)</sup>を正し、由り

て極<sup>(35)</sup>を建てざるべからず。然りと雖も文を學びて敏<sup>(36)</sup>ならず、事に

臨<sup>(37)</sup>みて昏然<sup>(38)</sup>たり。唯<sup>(39)</sup>だ敬畏<sup>(40)</sup>（畏敬）を存し、格知<sup>(41)</sup>を思い、礼<sup>(42)</sup>を齊<sup>(43)</sup>え

仁を求めて、士民を安んぜんと欲す。

然<sup>(44)</sup>り而<sup>(45)</sup>して己を修むる所、之れに由らずや。語<sup>(46)</sup>（論語）に曰く、

「己を修めて以て百姓<sup>(47)</sup>を安んずるは、堯舜<sup>(48)</sup>も其れ猶<sup>(49)</sup>お諸<sup>(50)</sup>れを病め

り」と。至れるかな、此<sup>(51)</sup>の言。難いかな、此<sup>(52)</sup>の道。嗚呼<sup>(53)</sup>、庶幾<sup>(54)</sup>わく

は其<sup>(55)</sup>の万に一を得て家<sup>(56)</sup>國に施さんことを。何をか道と云う。何をか

徳と云う。庸<sup>(57)</sup>（中庸章句）の所謂<sup>(58)</sup>達道<sup>(59)</sup>とは、共に由る所<sup>(60)</sup>にして性を

天に稟<sup>(61)</sup>くるなり。達徳<sup>(62)</sup>とは、同<sup>(63)</sup>に得る所<sup>(64)</sup>にして力を己に竭<sup>(65)</sup>くすなり。

實<sup>(66)</sup>に九經<sup>(67)</sup>を思えば則ち一に帰するなり。一とは、仁なり。仁とは、

性なり。仁を行うとは、知るなり。力<sup>(68)</sup>めて知るとは、勇<sup>(69)</sup>なり。然ら

ば則ち道なり、徳なり。力行<sup>(70)</sup>して文を學ばざれば、聖賢<sup>(71)</sup>の成法<sup>(72)</sup>（模

範<sup>(73)</sup>）を失う。而<sup>(74)</sup>して何ぞ事理<sup>(75)</sup>の当然たるを知らんや。吾<sup>(76)</sup>れ之れを

聞<sup>(77)</sup>く、朱晦庵<sup>(78)</sup>（朱熹）は孜孜<sup>(79)</sup>として已<sup>(80)</sup>まずと。是<sup>(81)</sup>を以て暇日<sup>(82)</sup>に文義を

學び、此<sup>(83)</sup>の生<sup>(84)</sup>を育<sup>(85)</sup>みて、以て孝・弟・慈<sup>(86)</sup>の三者<sup>(87)</sup>を存して民<sup>(88)</sup>を道<sup>(89)</sup>け

ば、則ち其<sup>(90)</sup>の力を竭<sup>(91)</sup>くすの端<sup>(92)</sup>なるか。

是<sup>(93)</sup>に於いて城郭<sup>(94)</sup>の西に別居<sup>(95)</sup>を構<sup>(96)</sup>えて、「観頤莊<sup>(97)</sup>」と号す。易<sup>(98)</sup>（易

經<sup>(99)</sup>）の所謂<sup>(100)</sup>「観頤<sup>(101)</sup>」の義<sup>(102)</sup>を取るなり。伝<sup>(103)</sup>（伊川易伝）に曰く、「推<sup>(104)</sup>

養<sup>(105)</sup>の義、大いなること天地<sup>(106)</sup>の万物<sup>(107)</sup>を養育し、聖人の賢<sup>(108)</sup>を養いて以て

万民<sup>(109)</sup>に及ぼすに至る。人の養生<sup>(110)</sup>、養形<sup>(111)</sup>、養徳<sup>(112)</sup>、養人<sup>(113)</sup>とともに、皆<sup>(114)</sup>な

頤<sup>(115)</sup>養<sup>(116)</sup>の道なり」と。是<sup>(117)</sup>れ其<sup>(118)</sup>の由<sup>(119)</sup>る所<sup>(120)</sup>にして、是<sup>(121)</sup>れ其<sup>(122)</sup>の養<sup>(123)</sup>う所<sup>(124)</sup>なり。

園圉<sup>(125)</sup>の間、遠邇<sup>(126)</sup>（遠近）の興<sup>(127)</sup>あり。山嶂<sup>(128)</sup>は西北<sup>(129)</sup>に列<sup>(130)</sup>なり、疇<sup>(131)</sup>田<sup>(132)</sup>

行すれば則ち養を成す。時に于いて文房の四友を携え、園林の衆奇を鍾めんと欲して、之れを陶泓(硯)に量るも、虚然として語らず、諸れを陳玄(墨)に問うも、研磨して応えず。偕に言う者は、毛穎子(筆)なり。

湛然たる池流は、灑灑激激として、藍より青く、緑にして指を染む。徐仲車は来たらざるも、其の吟此に在り。因りて「灑藍池」と称す。彼に臨む疊岨(重なり連なる岩山)、異株(珍しい木)奇石(珍しい石)璘璘蒼蒼たり。欧陽(欧陽脩)に何ぞ「佳木秀でて繁陰あり」と有るや。以て「繁陰山」と題す。

此に於いて山水を以て衆興を起し、仁智を尋ね、万春(とこしえの春)を属す。毛穎(筆)は以て紀し、楮国(紙)は以て載す。山間を越望すれば、飛泉(瀑布)湧き出づ。坡老(蘇軾)の所謂「青玉峽を壁き開き、飛び出づ両白龍」とは、其れ此れを以て観る。則ち「玉飛龍」と言うは、宜ならずや。洲畔に何か有る。翠有り陰有り、四時を含むこと千歳に合す。以て「仙洲松」と為すなり。「百尺にして条陰合し、千年にして蓋影披く」もの、李嶠の看しに非ずや。

漸く山を下れば、径水石を繞り、第有りて小檻を回らす。「連曳檻」と称す。鯉魚活潑にして、漣漪曳曳たり。岡有りて「鳳尾

岡」と称す。枝葉の青青たるは、鉄蕉(蘇鉄)なり。或いは「鳳尾蕉」と曰うなり。因りて以て之れに名づく。彼の高岡たるや、鳴かざるも亦た一奇なり。

水辺を望めば則ち枯葛屈盤して、其の形逸龍の躍りたるに似たり。以て「濟旱木」と名づく。蘇公(蘇軾)に詩有り、「遷りて甘霖を作し 旱の民を済う、龍たり龍たり飛躍する」といふと曰えるかな。済民の化(造化)も、又た応に此れに寓すべし。砌に閣を構え、「含清閣」と号す。謝靈運の所謂「山水清暉を含む」の句より取る。蒼蒼たる影、潺潺たる声、以て愛翫すべし。左に水涯に傍い、偶たま芝草生ず。煌煌皦皦として、群卉の類に非ず。嘗て明世の瑞と聞くなり。漢殿茎を重んじ、「芝房の歌」を作る。「謝庭比玉」とは、子孫の秀づるを称う。因りて「玉生芝」と名づく。以て祥と為すべし、以て慶と為すべし。

此の閣を過ぎて、右を顧みれば則ち長架に枝を垂れ、藤花紫を凝らす。一片の紫氣、李老君(老子)を迎えんと欲す。則ち香山(白居易)に言有り、「蔓を引きて林樹を出で、綸を垂れて巢鶴を覆う」とは、此の紫英(紫色の花)を指さずや。之れを以て「蔓綸藤」と賞す。水涯に臨みて小屋有り、「漱玉窩」と号す。陸士衡(陸機)の所謂、「飛泉鳴玉を漱ぐ」とは、是を以て見るべし。



天山 秀を鍾め、晴霞 霽霽たり。館址の崇跡、蒼松 鬱鬱たり。今津は横に長堤を連ね、遠帆 地を拆きて来去す。龍門は高く緑萃を攢め、佳月 林を分かちて升起照らす。里外の市邇く、茆簷(茅葺き家の軒)の参差たるを見る。野田の疇潤く、賓雁の嘹唳を聞く。砥川 翠を聳やかし、夕陽に相映ず。莊村 穂を連ね、農夫 獲て蔵む。是れ八景の梗概にして、園外の四時なり。物を観ずるの理、推して知るべし。

既に此の窩(漱玉窩)を過ぎ、遠望を凝らせば、則ち深山 鬱鬱として、鳥声 嚶嚶たり。所謂「黄鳥、丘隅に止まる」ものなるかな。以て「止鷺山」と名づく。至善の地は、人の知らざるに在り。之れに止まる所以なり。以て感じて観るべし。

小径を過ぎれば、南に一茶店を置く。「歇涉店」と名づく。佐輔曰く、「独り山家を訪ね 歇い還た渉る」と。来遊の客、此に到れば由りて暫く憩息うなり。東に長橋を度れば、秀でたる楼有り。「真意楼」と号す。仰ぎて北嶂を見、俯して南山を思えば、此の間意(39)に真意有り、辨ぜんと欲して已に言を忘る。乃ち陶潜(陶淵明)の意を取る。楼辺 東に当たり、又た茅廬を結ぶ。「欲辨舍」と名づけて、以て「真意楼」に通ぜしむ。是れ吾れ佳趣を辨ぜんと欲するの謂いなり。

楼上柱壁の間、往往にして朽木・枯葛を以て扁額に代う。一を「見牛木」と曰う。其の面の相い類るに因り、就く求仁の謂いを見るなり。(40)二を「蟠龍木」と曰う。其の形の相い似るに因り、以て変化を察すべし。三を「常山霊」と曰う。首尾 相い救うに象り、以て文理を論ずべし。(41)四を「観瀾葛」と曰う。其の紋の相い斉うに因り、以て本末を覚るべし。(42)五を「霊洞樾」と曰う。其の中の虚しきに因り、以て仙遊を察すべし。(43)事言に寓すと雖も、又た由る所無きに非ざるなり。

而して四もに望めば則ち背岳(背振山)北に抽きて、積雪 眸に清し。温泉(雲仙岳)南に横たわり、蒸煙 凝望せしむ。多良(太良岳)は霧斜めにして、西南の間に掩映す。西疇万頃、碁のごとく布き 綺のごとく分かれ、稲梁 連なること雲のごとくして、民事(農事)の勞に感ぜしむ。曲江 四もに遶り、練の如く穀の如し。長橋 流れに横たわり、龍に擬し虹に比す。至若 前池 溶溶として、朗月 澄清たり。湾溪 浚浚として、桃花 浪を染む。堆岩 砌に近く、忽ち飛泉の濺沫に驚く。沙場 衢に開かれ、時に講馬半漢たるを見る。春は則ち花塙 錦を織り、若蘭の機を仮る。秋は則ち楓樹 紅を飄し、杜牧の車を停む。(46)層阜(重なつて連なる山々)に径分かれ、仙蹤 応に尋ぬべし。野水に舟を泛べ、清浅(天河)に渡ら

んと欲す。<sup>(47)</sup> 廬畔<sup>(48)</sup>の金井、朽ちず濁らず。糸桜<sup>(49)</sup>(しだれ桜)長く垂れ、短縄<sup>(50)</sup>(短い釣瓶の縄)に代えんと欲す。恵山<sup>(51)</sup>遠からず、建溪<sup>(52)</sup>此に在り。芳を味わい茗を賞するに、何ぞ清きを汲まざらんや。沓院<sup>(53)</sup>遠くにある寺院)郭を隔て、鳧鐘<sup>(54)</sup>声を伝う。正に卯酉<sup>(55)</sup>(朝晩)呂律の時、風花雪月の興を惜しむ。是れ則ち楼上の十五事にして、園中の雅望<sup>(56)</sup>なり。六義<sup>(57)</sup>の風、推して辨ずべし。

此の楼を下り、杖を引き屨<sup>(58)</sup>(歩)を進め、逍遙<sup>(59)</sup>して数程を経れば、北に「八仙堂」を構う。南極(南極老人)を以て主と為す。古に曰く、「国家盛んに治まれば、則ち南極見わる」と。祥風瑞霞、仁寿の域に躋<sup>(60)</sup>るが如し。西に茅舍<sup>(61)</sup>有り、扁<sup>(62)</sup>して「蓬班」と曰う。玉川子(盧全)の茶歌(「走筆謝孟諫議寄新茶」)の所謂、「蓬萊山、何れの処にか在る」なり。茶を嘗め客を引き、班(雅会)を催す場と為す。彼に見ゆる霊梅、嶺の如く島の如く、扇の如く船の如し。看るに随いて興を異にし、遂に以て詩を釣る。「釣詩梅」と名づく。胡澹庵(南宋・胡銓)の所謂、「一年の佳処 早梅の時、風情を勾引して巧みに詩を釣る」とは、其れ此に在るかな。堤上を顧みれば、則ち稚松<sup>(63)</sup>翠を連ね、月姿を含み、煙格<sup>(64)</sup>を帯ぶ。眉山<sup>(65)</sup>(蘇軾)の所謂「坐して待つ 双龍蛇、清陰 南の階に満つるを」とは、其の稚松を愛するかな。以て「龍陰堤」と称す。百尺を期し、千歳を約す。

小径を廻れば、北に一廬有り。「团香廬」と曰う。茅宇<sup>(66)</sup>团团として、庭石門戸も亦た然り。明月の团か、明珠の团か。龍鳳<sup>(67)</sup>団を設くるを曰うなり。梅聖俞<sup>(68)</sup>(梅堯臣)曰く、「团香已に中都府に入る」と。「府」を以て「廬」に代うるも、又た雅ならずや。

此を過ぐれば、路<sup>(69)</sup>回り、境異なる。而して別に一径有り、「興慶野(墅)」に入る。唐の「興慶池」に效いて、牡丹数品を種ゆ。黄や紫や、魏<sup>(70)</sup>(魏紫)に入り姚<sup>(71)</sup>(姚黄)に入る。天香を引き、国色を愛す。因りて以て墅に名づく。粵に門有り、「五柳門」と扁す。牡丹の艶麗を看、楊柳の輕盈に對すれば、則ち洛陽の榮れ、彭沢の風、一園に地を易え、千歳に趣を同じくす。無心の雲起こり、有聲の鳥<sup>(72)</sup>帰る。園に日び渉り意を寓する所以なり。

既にして曲径を繞らし、門牆を囲い、「至聖殿」を造建す。素より城苑の内に営みて、二丁に祭儀し、厚く蘋蘩を薦む。然るに郭裏(城内)の狹隘を以て、尊殿を此に遷す。敢えて園囿の觀とせざるは、邦家(国)の祥を仰ぐ所以なり。煥らかにして文有り、嚴かにして威有り。「由道門」「声振門」は、稽首<sup>(73)</sup>揮手して過ぐ。傍らに長廊を構え、倭漢の籍を納む。漢庫は「芸暉閣」と名づけ、倭庫は「随扈府」と号す。翰墨の神仙、道家の蓬萊、千古を今日に觀るものかな。

此こを過ぎ、逍遙<sup>しやうよう</sup>散步<sup>さんぽ</sup>の間、恢<sup>ひろ</sup>々<sup>く</sup>楠木<sup>くすのき</sup>の陰<sup>かげ</sup>有り。枝葉<sup>えだ</sup>繁<sup>さか</sup>り鬱<sup>ふさ</sup>んなれば、之れに傍<sup>そば</sup>いて寄寓<sup>きぐう</sup>す。「濃陰<sup>のういん</sup>廬<sup>いん</sup>」と号<sup>なづ</sup>す。嘗<sup>かつ</sup>て諸<sup>しよ</sup>れを王<sup>おう</sup>穀<sup>こく</sup>の「満地<sup>まんち</sup>の濃陰<sup>のういん</sup>」前に去<sup>さ</sup>るに懶<sup>ものう</sup>し<sup>(71)</sup>に聞<sup>き</sup>くもの、其れ此こに在<sup>あ</sup>るかな。又<sup>また</sup>た一境<sup>いっけい</sup>に入<sup>い</sup>れば、「妙相<sup>みょうそう</sup>堂<sup>どう</sup>」有<sup>あ</sup>り。普陀<sup>ふだ</sup>の像<sup>ざう</sup>を安置<sup>あんじ</sup>す。厥<sup>そ</sup>の境<sup>きやう</sup>裏<sup>り</sup>(境内<sup>けいん</sup>)を顧<sup>かへ</sup>みれば、「羅漢<sup>らかん</sup>堂<sup>どう</sup>」を宮<sup>みや</sup>む。是<sup>こ</sup>れ中華<sup>ちゅうか</sup>の石像<sup>せきざう</sup>なり。必<sup>かならず</sup>ずしも異端<sup>いどん</sup>を崇<sup>たうと</sup>ぶに非<sup>あら</sup>ず、民俗<sup>みんぞく</sup>の仰敬<sup>ぎやうけい</sup>に任<sup>ゆた</sup>ぬるなり。書<sup>しよ</sup>(書経<sup>しよきやう</sup>)泰誓<sup>たいし</sup>上篇<sup>じやうへん</sup>に曰<sup>い</sup>く、「天<sup>てん</sup>民<sup>みん</sup>を矜<sup>あは</sup>れむ。民<sup>みん</sup>の欲<sup>よく</sup>する所<sup>しよ</sup>は、天<sup>てん</sup>必<sup>かならず</sup>ず之れに従<sup>したが</sup>う」と。之れに由<sup>よ</sup>りて思<sup>おも</sup>へば、是<sup>こ</sup>れも亦<sup>また</sup>た自<sup>みづか</sup>ら勸善<sup>かんぜん</sup>懲惡<sup>ちやうあく</sup>の道<sup>みち</sup>なり。あるいは歩<sup>あ</sup>みあるいは顧<sup>かへ</sup>み、水涯<sup>すいがい</sup>を繞<sup>めぐ</sup>れば、高樓<sup>かうろう</sup>有<sup>あ</sup>り。「雲捧<sup>うんほう</sup>楼<sup>ろう</sup>」と名<sup>な</sup>づく。王平甫<sup>わうへいほ</sup>の「雲<sup>うん</sup>は樓台<sup>ろうだい</sup>を捧<sup>ささ</sup>げて天上<sup>てんじやう</sup>に出<sup>い</sup>でしむ」の句<sup>く</sup>より取<sup>と</sup>る。四<sup>よ</sup>もに顧<sup>かへ</sup>みれば茫<sup>ぼう</sup>茫<sup>ぼう</sup>として、眼界<sup>がんがい</sup>高豁<sup>かうかつ</sup>たり。近<sup>おほ</sup>く王子瑞籬<sup>わうじずいり</sup>を望<sup>のぞ</sup>み、神靈<sup>しんれい</sup>の和光<sup>わこう</sup>を仰<sup>あが</sup>ぐ。大榭<sup>おほび</sup>に村連<sup>むら</sup>なり、秀<sup>ひ</sup>でたる穂<sup>ほ</sup>に秋多<sup>あき</sup>し。暘<sup>ひ</sup>若<sup>いた</sup>り、雨<sup>あめ</sup>若<sup>いた</sup>り、農夫<sup>のうふ</sup>野<sup>の</sup>に拊<sup>う</sup>つ。風煙<sup>ふうえん</sup>靄<sup>あい</sup>靄<sup>あい</sup>たり、禾黍<sup>かしよ</sup>離<sup>り</sup>離<sup>り</sup>たり。村<sup>むら</sup>を末次<sup>すまつ</sup>に指<sup>さ</sup>し、望<sup>のぞ</sup>を旦昏<sup>たんこん</sup>に引<sup>ひ</sup>く。八田<sup>はつた</sup>に眸<sup>ひま</sup>を凝<sup>か</sup>らせば、青松<sup>せいしやう</sup>亭<sup>てい</sup>亭<sup>てい</sup>として、春<sup>はる</sup>と無<sup>な</sup>く秋<sup>あき</sup>と無<sup>な</sup>く、翠雲<sup>すいうん</sup>の連<sup>れん</sup>なるを見る。舞鶴<sup>ぶかく</sup>鳴<sup>な</sup>き和<sup>わ</sup>し、毛詩<sup>もうし</sup>(詩經<sup>しきやう</sup>)を繙<sup>ひら</sup>かんと欲<sup>ほ</sup>す。九臯<sup>きゅうこう</sup>に非<sup>あら</sup>ず、南里<sup>なんり</sup>に在<sup>あ</sup>り。祥煙<sup>しやうえん</sup>瑞霞<sup>ずいか</sup>、德善<sup>とくぜん</sup>に院<sup>いん</sup>を囲<sup>かこ</sup>み、光<sup>ひかり</sup>は家國<sup>かこく</sup>を被<sup>おほ</sup>い、応<sup>ま</sup>に千秋<sup>せんしゆ</sup>に護<sup>まも</sup>るべし。稻<sup>いな</sup>佐山<sup>さやま</sup>遠<sup>とほ</sup>く、雲<sup>うん</sup>を引<sup>ひ</sup>き煙<sup>けむり</sup>を帶<sup>たづ</sup>ふ。残月<sup>ざんげつ</sup>の婢媚<sup>せんめい</sup>たるを愛<sup>あい</sup>し、詩境<sup>しきやう</sup>の幽<sup>ゆう</sup>玄<sup>げん</sup>たるを尋<sup>たづ</sup>ねんと欲<sup>ほ</sup>す。彼<sup>か</sup>の寺井<sup>てらい</sup>を瞻<sup>み</sup>れば、滄海<sup>そうかい</sup>渺茫<sup>びやうまう</sup>たり、天晴<sup>てんせい</sup>

るれば則<sup>すなは</sup>ち近<sup>ぎ</sup>く吟眸<sup>ぎんぼう</sup>(詩人<sup>しにん</sup>の視界<sup>しがい</sup>)に入<sup>い</sup>る。蓬<sup>ほう</sup>(蓬萊<sup>ほうらい</sup>)か瀛<sup>えい</sup>(瀛州<sup>えいしゆ</sup>)か、茲<sup>これ</sup>を思<sup>おも</sup>へば茲<sup>こゝ</sup>に在<sup>あ</sup>り<sup>(76)</sup>。何処<sup>いずこ</sup>に遠帆<sup>えんはん</sup>するや、早津<sup>はやつ</sup>に舟浮<sup>ふね</sup>かぶ。西<sup>せい</sup>に征<sup>ちやう</sup>き東<sup>とう</sup>に帰<sup>かへ</sup>り、来去<sup>らいきよ</sup>稀<sup>まれ</sup>ならず。樓上<sup>ろうじやう</sup>の望<sup>のぞ</sup>に寄<sup>よ</sup>せ、篷底<sup>ほうてい</sup>の看<sup>かん</sup>を思<sup>おも</sup>う。橐<sup>たく</sup>尾<sup>び</sup>(山<sup>さん</sup>の名<sup>な</sup>)西<sup>せい</sup>に聳<sup>そび</sup>え、夕陽<sup>しやくやう</sup>の斜影<sup>しゃえい</sup>を留<sup>とど</sup>め、万景<sup>ばんけい</sup>の熹微<sup>きび</sup>(微<sup>み</sup>かな光<sup>ひかり</sup>)を惜<sup>おし</sup>しむ。朝旭<sup>ちやうしやく</sup>熙熙<sup>きき</sup>として、自<sup>みづか</sup>ら遠<sup>とほ</sup>く自<sup>みづか</sup>ら高<sup>たか</sup>し。風雲<sup>ふううん</sup>態<sup>たい</sup>を變<sup>かへ</sup>じ、阿蘇<sup>あそ</sup>東<sup>とう</sup>に噴<sup>ふ</sup>く。皆<sup>みな</sup>な是<sup>こ</sup>れ遠邇<sup>えんじ</sup>(遠近<sup>えんじん</sup>)の壯觀<sup>そうかん</sup>にして、景<sup>けい</sup>は十一を拾<sup>ひろ</sup>うも、興<sup>きやう</sup>は千百<sup>せんひやく</sup>を含む<sup>ふく</sup>。

漸<sup>ようや</sup>く此<sup>こ</sup>の樓<sup>ろう</sup>を下<sup>くだ</sup>れば、徑<sup>こみち</sup>有<sup>あ</sup>り流<sup>なが</sup>れ有<sup>あ</sup>り。竹<sup>たけ</sup>の圈<sup>か</sup>いを構<sup>かま</sup>えて、異<sup>い</sup>域<sup>いき</sup>(外<sup>がい</sup>國<sup>こく</sup>)の奇獸<sup>きじゆ</sup>を育<sup>はぐ</sup>む。語<sup>ご</sup>(朱熹<sup>しゆき</sup>「論語序說<sup>ろんごしよしゆ</sup>」)に、「司職<sup>ししやく</sup>の吏<sup>り</sup>と為<sup>な</sup>り、畜<sup>ちく</sup>(家畜<sup>かちく</sup>)蕃息<sup>はんしよく</sup>(繁殖<sup>はんしよく</sup>)す」と曰<sup>い</sup>へば、聖德<sup>せいとく</sup>(立派<sup>りつぱ</sup>な德<sup>とく</sup>)の厚<sup>あつ</sup>きこと、益<sup>えき</sup>ます感<sup>かん</sup>ずべし。因<sup>よ</sup>りて「蕃育<sup>はんいく</sup>」の字<sup>じ</sup>を扁<sup>へん</sup>して、其<sup>その</sup>の愛心<sup>あいしん</sup>を焉<sup>こゝ</sup>に寓<sup>お</sup>す。

既<sup>すで</sup>に此<sup>こ</sup>を去<sup>さ</sup>れば、一水<sup>いっすい</sup>一橋<sup>いっけう</sup>あり、亭<sup>てい</sup>有<sup>あ</sup>りて「窺牆<sup>しゆじやう</sup>」と号<sup>なづ</sup>す。亭<sup>てい</sup>は聖殿<sup>せいでん</sup>に隣<sup>とな</sup>るを以<sup>もつ</sup>て、数仞<sup>すうじん</sup>の牆<sup>かき</sup>を窺<sup>うかが</sup>わんと欲<sup>ほ</sup>す。廊<sup>ろう</sup>を繞<sup>めぐ</sup>れば「玉鈎觀<sup>ぎよくかん</sup>」有<sup>あ</sup>り。「仙宮<sup>せんきゆう</sup>雲箔<sup>うんぱく</sup>捲<sup>ま</sup>かれて、玉簾鈎<sup>ぎよくれんこう</sup>を露出<sup>ろしゆつ</sup>す」(新月<sup>しんげつ</sup>)とは、虛全<sup>ろどう</sup>の謂<sup>い</sup>いなり。之<sup>これ</sup>を以<sup>もつ</sup>て之<sup>これ</sup>に名<sup>な</sup>づく。

傍<sup>かたわ</sup>らに月榭<sup>げつしゃ</sup>を築<sup>つく</sup>く。以<sup>もつ</sup>て朗月<sup>ろうげつ</sup>を望<sup>のぞ</sup>む所<sup>しよ</sup>なり。座傍<sup>ざぼう</sup>に幌<sup>とほり</sup>を披<sup>ひら</sup>き、「抱明榭<sup>ほうめいしゃ</sup>」の字<sup>じ</sup>を書<sup>か</sup>す。坡老<sup>はらう</sup>(蘇軾<sup>そしつ</sup>)の所謂<sup>しよゐ</sup>、「明月<sup>めいげつ</sup>を抱<sup>いだ</sup>く」の興<sup>きやう</sup>とは、長<sup>なが</sup>に此<sup>こ</sup>に觀<sup>かん</sup>るものかな<sup>(80)</sup>。又<sup>また</sup>た月<sup>げつ</sup>の姿<sup>かたち</sup>を象<sup>かたど</sup>り、白兔<sup>はくと</sup>を描<sup>え</sup>き、圀

むに桂樹を以てす。団欒の影、扶疎の陰。枝を穿つに吳剛の斧を借り、戸を隔てて蟾宮の象を窺う。嘗て聞く、翟乾祐水精（水晶）を以て月と為し、瑤（瑤玉）を刻みて兔と為す、と。神仙の跡、由る無きに非ざるなり。翰墨の術、以て托すべし。

此の亭の園裏に、一鐘樓を設く。漏刻を知るの謂いのみに非ず。古に曰く、「君子金を鏤かして鐘を為り、四時に九乳あり。是を以て鐘を撞き、声調えば則ち君道得たるなり」と。豈に翹だ虚しく設けんや。此に於いて銘併びに序を誌して曰く、「宇宙の造化、万物の動静、唯だ九乳の響音の中に在り。至若、春來たりて花馨れば、則ち能因（能因法師）の山寺暮天を想い、秋候に月寒ければ、則ち張説の春陵静夜を述めて、以て斯れに臨む茶店に遊びて、呂刻律時（朝晩）の点籌、人力を借りずして以て巧みに之れを撞くを聴く。即ち是れ余の丹精を保ち、丹心を養いて、遊人を慰めんが為なり。銘して曰く、鄭公徳を抱き、晁氏形を製る。園囿千歳、長に視て長に聴かん、と」と。繋る歳は是れ壬午の冬なり。銘を顧みれば則ち不肖子なり。

既にして林徑を過ぐれば、竹有りて風を含み、簫に非ず瑟に非ず。賦を「此君軒」に尋ねて、名を「風簫檐」と称す。閑にして雅なり、雅にして音有り。茅廊緩やかに回らされ、竹檻長く連なる。珍禽

比び棲み、羽儀相い映ず。素より異域（外国）より伝來す。「和鳴」の扁額有り。今異禽を得たれば、幸いにして此の軒に掲ぐ。偶然にして和鳴の歎び有るものなり。又た傍らに扶桑の禽鳥を集めて、「愛棲」の字を顔す。其の棲むを愛するを以ての謂いなり。公治長に非ざれば、何ぞ其の語に通ぜん。王子猷（王徽之）に非ざれば、何ぞ其の楽しみを知らん。

側らに亭有り、「代璋弄」と呼ぶ。其の物は彈丸の戯れなり。戯れに似せるは由有り。詩（詩經）に言わずや、「男子生まるれば則ち璋を弄せしむ」と。以て其の徳に比すなり。余に小姫（娘）有り。徳教の道、隔つべからざるなり。璋に代えて之れを弄せしむ。徳寿は天の申ばす所なり。思わざるべけんや。

皆な是れ莊園の風物にして、以て生を養い、徳を養う所なり。何ぞ周文の囿に擬えんや。何ぞ齊宣の楽しみに由らんや。夫の願の義を顧みれば、至れり、尽くせり。大なるを語れば、則ち天地育物の事なり。小なるを語れば、則ち園囿養心の要なり。徳性を辨ずれば速やかに会得し、道の教えを辨ずれば敏にして既に行う。花木の理は、推して文質を觀るべし。禽鳥の声は、推して楽和を感ずべし。水流の不測は、推して含洪を知るべし。山岳の厚重は、推して仁寿を求むべし。此に於いて養生する所を得れば、則ち長に事うる

所を得、長に事うる所を得れば、則ち民に恵む所を得。然らば則ち  
頤の義を論ずること至ると雖も、頤を観るに庶からんや。遂に以て  
莊居に名づけ、自ら識す。

元禄 壬午（十五年） 仲冬（十一月）の日

肥侯拾遺補闕 藤貞伯固

致徳斎主人 景を撫い言を焉ここに迷む

印記 略（「解題」を参照）

## 「観頤莊記」附録編

【口絵賛】易に曰く、「頤は、貞しければ吉なり」と。<sup>(97)</sup> 彖に曰く、「其  
の養う所を観るなり。天地は万物を養い、聖人は賢を養  
いて以て万民に及ぼす。頤の時大いなるかな」と。

【題 字】「義を推し英を拾い編す」 致徳斎篆す

印記 略（翻刻編を参照）

観頤莊（城西の別荘の名なり）

易（「易経」）に曰く、「観頤」と。伝に曰く、「推養の義、大い  
なること天地の万物を養育し、聖人の賢を養いて以て万民に

及ぼすに至る。人の養生、養形、養徳とともに、皆な頤養の  
道なり」と。

澗藍池（莊居の前の池なり）

徐 仲車の詩「淮之水」に、「藍より青く、緑にして指を染  
む。 激激瀼瀼たり 天の尽头」とあり。<sup>(98)</sup>

繁陰山（莊第の南の山なり）

欧陽脩（欧陽脩）の亭記（「醉翁亭記」）に、「佳木 秀でて 繁陰  
あり」とあり。

玉飛龍（繁陰山の岩の畔に飛泉有り）

東坡（蘇軾）の詩（「廬山二勝・開元漱玉亭」）に、「青玉 峽を  
攀き開き、飛び出づ 兩白龍」とあり。

仙洲松（繁陰山の麓の洲の畔に松有り）

慕母潜の詩（「題沈東美員外山池」）に、「仙郎 偏えに道を好み、  
沼を鑿ちて瀛洲に象る」とあり。

止鷺山（繁陰山の東に当たり、相い邀う）

詩（「詩経」小雅・綿蛮）に曰く、「（綿蛮たる） 黄鳥、丘隅に  
止まる」と。

連曳檻（繁陰山の後、南に第存り。池有り、鯉魚 活潑たり。之れを廻

らすに檻を以てす）



杜甫の詩（「重題鄭氏東亭」）に、「清漣水衣を曳く」とあり。

含清閣（水涯に傍い、山の畔に構う）

謝靈運の詩（「石壁精舍還湖中」）に、「山水清暉を含む」とあり。

鳳尾岡（含清閣の前に当たり、岡有り、蘇鉄を栽ゆ）

『潜確（居）類書』に曰く、「鉄蕉、一に鳳尾蕉と曰う」と。

渚草木（朽木龍に類たれば、以て之れを造脩し、鳳尾岡の辺に蟠らしむ）

東坡（蘇軾）の詩（未詳）に、「遷りて甘霖を作し 旱の民を済う」とあり。

玉生芝（止鷺山の麓に、今茲の秋、靈芝初めて生じ、水涯に嘩く）

謝安（「謝玄」の誤り）曰く、「子弟、譬うれば芝蘭・玉樹の階庭に生ずるが如し」と。

蔓緬藤（含清閣の西南、紫を漱玉窩の間に望む）

白楽天（白居易）の詩（錢起「古藤」詩の誤り）に、「蔓を引きて林樹を出で、綸を垂れて巢鶴を覆う」とあり。

漱玉窩（水涯に臨みて窩を築く。窩中の瞻望、八景を拾う）

陸士衡（陸機）の詩（「招隱詩」）に、「飛泉鳴玉を漱ぐ」とあり。

## 題壁「八景」

天山晴霞

西北の間に当たり、天山有り。霞晴るれば則ち遠く屏顔（山が  
高く険しいさま）を見わし、靄靄蒼蒼たり。因りて奇観と為す。  
館址蒼松

旧館の址に、千株の松あり、崇崇蒼蒼として、古を覽、今を  
視る。以て西阡の勝景と為す。

龍門升月

龍門山は東に当たり、俗に呼びて「宝琳院」と云う。佳月翠  
陰を分かちて、林端に升る。以て望月の美観と為す。

今津遠帆

今津 西に折れ、横に雲樹を連ぬ。岸を隔てて遙かに風帆の  
来去を見る。

里外茅檐

西のかた教程を経れば、里外の市有り。茅檐の参差たるを望  
み、商賈の来往を見る。

野田賓雁

野田の千疇、賓雁の嘹唳。村家を望みて、秋風に感ず。



砥川夕陽 とがわせきやう

砥川山は西に当たり、翠屏雲のごとく開く。夕陽の影落つれば、以て吟望を寄すべし。

莊村農夫 しやうそんのうふ

遠く西嶂を望めば、村有りて本莊と称す。秀でたる穂連なること雲のごとく、農夫獲て蔵む。

歇涉店 けつしやうてん〔漱玉窩を過ぎて、真意楼の間に憩う〕

長孫佐輔の詩〔尋山家〕に曰く、「独り山家を訪ね歇い還た渉る」と。

真意楼 しんいろう〔莊居の東南に秀でたり〕

陶潜〔陶淵明〕の詩〔飲酒〕第五首に、「山氣日夕に佳く、飛鳥相い与に帰〔還〕る。此の間〔中〕に真意有り、辨ぜんと欲して已に言を忘る」とあり。

楼中の葛木、「五珍」と号して、曰く

見牛木 けんぎゅうぼく

朽木なり。其の面牛に類たれば、牛〔牛頭人身の神農のこ

とか）の仁術を見るを取りて、以て之れに名づく。

蟠龍木 ばんりゅうぼく

朽木なり。其の形龍に似たれば、以て之れに名づく。

常山靈 じやうざんれい

枯葛なり。常山の蛇に比すなり。

觀瀾葛 かんらんか

葛藟なり。貫綴して波紋に似たれば、以て焉れに名づく。

靈洞樵 れいどうしやう

朽木なり。空虚を以て之れに名づく。

楼中の題壁「十五景」

背岳積雪 せだけせきせつ

背振山は、辨天の靈区なり。衆山に冠冕して、光は九州を被う。神威万祥、積雪千秋。因りて此に瞻仰す。

温泉蒸煙 うんせんじやうえん

温泉山は、南方の一奇觀なり。而して靄煙蒸すが如く、勢いは雲夢を呑む。万岳煙無きに非ざるなり。十手の指す所なり。

多良翠霧

多良嶽は、西南の間に出づ。崢嶸縹緲として、遠霧を翠微の表に見るのみ。

曲江龍橋

園中に盤曲の江有り。長橋流れに横たわり、偃す形龍の如し。往來の園客、之れに由らざる無し。因りて以て之れを称う。

平原花塲

花塲錦を織り、原野緑を布く。此の境に遊べば、則ち園庭の裏に在るを忘れて、平原の外に出づるが如し。

前池澄月

池は莊居の前に在り。水の清きこと鑑みるべく、月の澄めること応に弄ぶべし。氣を同じくして相い求むるの謂い、此に在り。

湾溪桃花

湾溪園を繞りて、桃花流れを挾む。翠靄の紅雲に入るを望みて、以て一境の勝と為すなり。

堆岩飛泉

堆岩の際、飛泉湧き出づ。瀝瀝冷冷として、噴玉翠を分かつ。騷客行人、憩いて此に留まる。

沙場講馬

園徑の傍ら、一道の平沙有り。以て講馬の場と為す。

層嶺仙徑

嶺回りて路転じ、層翠青を送る。此に遊べば、則ち塵寰を出でて、仙蹤を尋ぬるが如きなり。

廻岸楓樹

岸を回るは皆な楓なり。莊園の一奇にして、聊か楚岸の錦に比すなり。

西疇觀稼

園外の蒼蒼たるは、禾稼（穀物）なり。万頃の西疇を望みて、民事（農事）の倦勞を思ふ。其の興を取らず、其の恵を取る。題して忘れざるなり。

桜下金井

桜下に井有り。其の花糸を垂れ、其の水緑を浮かべ、兩般相映ず。以て之れに名づく。

野渡泛舟

野水清浅にして、渡し有り舟有り、泛然として行客を待つが如し。以て雅興を寓す。

沓院漏鐘

園外に院遠くして、漏鐘の声を聞き、雲樹の村を看る。以て其の興を惜しみ、焉れを題す。

欲辨舍〔真意楼の傍らの茅舎なり〕

陶潜〔陶淵明〕の詩〔飲酒〕第五首に、「辨ぜんと欲して已に言を忘る」とあり。

八仙堂

八仙人の像を置く。南極〔南極老人〕を以て主と為す。

蓬班〔八仙堂の西境の小店なり。以て園に行きて班〔雅会〕を待つ所と為す〕

玉川〔盧仝〕の茶歌〔走筆謝孟諫議寄新茶〕に、「蓬萊山、何れの処にか在る」とあり。

釣詩梅〔偃梅船の似くして、蓬班の傍らに横たわる〕

胡澹庵〔胡銓〕の詩〔和林和靖先生梅韻〕第四首に、「一年の佳き処 早梅の時、風情を勾引して 巧みに詩を釣る」とあり。

龍陰堤〔堤松並びに翠にして、蓬班の前野に在り〕

東坡〔蘇軾〕の詩〔種松得徠字〕に、「坐して待つ 双龍蛇、清陰 南の階に満つるを」とあり。

团香廬〔莊居の坤〔南西〕の隅の野に、一廬を築く。茅宇・門戸 团

樂たり。以て之れに名づく〕

梅聖俞〔梅堯臣〕の茶詩〔依韻和杜相公謝蔡君謨寄茶〕に、「团香 已に中都府に入る」とあり。

興慶墅〔觀頤莊の東南に当たり、門牆を隔てて、別墅を開く〕

唐の開元中、牡丹を興慶池の東、沈香亭の前に種ゆ。今牡丹を種えて、以て墅に名づく。

五柳門

五株の柳を植え、径を開きて、以て門を興慶墅に設け、陶潜〔陶淵明〕の門柳の旧名を借る。

至聖殿

興慶墅の中に在り。別に一場を囲い、内外の重門有り。

声振門〔内門なり〕

『孟子』〔万章下篇〕に曰く、「孔子之れを集大成すと謂うは、金声して玉振するなり」と。

由道門〔外門なり〕

『論語』〔雍也篇〕に曰く、「誰か能く出づるに戸に由らざらんや。何ぞ斯の道に由る莫からんや」と。

芸暉閣〔漢庫なり。聖殿の後徑に構う〕

『杜陽（雜）編』に曰く、「元載、芸暉堂を造る。芸暉草を用いて壁に塗る」と。

拙府〔倭庫なり。長廊を回らして、漢庫に通ぜしむ〕

古今序〔古今和歌集真名序〕に曰く、「民の欲するに随い、士の才を択ぶ」と。

濃陰廬〔洪いなる榎の樹に倚りて、茅軒を設く。園に渉り、此に憩う〕

王穀の詩〔暑日題道辺樹〕に、「滿地の濃陰前に去るに懶し」とあり。

妙相堂

観音の像を安置す。聖殿を隔てて、一境有るなり。

羅漢堂

妙相堂の傍らに在り。中華の石彫なり。

雲捧楼〔観頤莊の東南に森たり。十一景を扁す〕

王介甫（王安石）の詩〔楊蟠「甘露寺」詩の誤り〕に、「雲は楼台を捧げて天上に出でしむ」とあり。

## 楼中の「十一景」題壁

王子瑞籬

楼前、数十弓を隔てて、王子宮（王子権現）を巽（南東）の隅に望む。昭らかなる瑞籬に、長に和光を仰ぐ。

大樋杵農

大樋村（大井樋村）は南に当たる。近く農夫の耕すを見、野に抔つの歓びを聞く。

末次香煙

南のかた数程を隔てて、末次村有り。茅宇分ち難く、風煙の靄靄たるを望む。

八田連松

八田村は巽（南東）に当たり、長堤翠を連ぬ。青松の亭亭たるを見、春秋の蒼蒼たるを愛す。

南里舞鶴

南里の邑、東北の間に在り。其の地寛閑として、舞鶴攸を相和鳴す。之れを以て佳境と為すなり。

徳善靈森

徳善院は、家國庇護の場なり。且つ神靈の瑞驗有り。以て万

秋に仰ぎ、靈森を瞻望す。

### 稻佐残月

稻佐山 西に聳ゆ。残月を留め、曉雲を引く。以て詩境の餘懷を添う。

### 寺井晴滄

寺井 東南の間に当たり、天水一色なり。雲晴るれば則ち滄波渺茫として、近く吟眸に入る。

### 早津遠帆

早津 寺井とともに相い並ぶも興を異にす。雲樹の間、遠く風帆を指して、以て美観と為す。

### 臺尾夕照

臺尾山 西に聳ゆ。夕陽影を留め、山色楼に入る。

### 阿蘇朝暉

阿蘇山 東に当たる。遠く肥後を指して、楼上に望を引けば、地を異にするも興を同じくす。翠煙暉暉として、以て出日を賓く。

### 蕃育園

〔竹の園いを設けて、異域（外国）の珍獸を育み、「蕃育」の額を掲ぐ〕

語（朱熹「論語序説」）に曰く、「司職の吏と為り、畜（家畜）蕃息（繁殖）す」と。

### 窺牆亭

〔此の亭 聖殿に隣るを以て之れに名づくなり〕

### 鐘樓

〔窺牆亭の園裏の森鬱たるに在り〕

### 玉鈞觀

〔迴廊 窺牆亭に通ず〕

### 抱明榭

〔玉鈞觀の傍らに、月榭台を築く。榭に壁を設けず。故に鈞觀の西の戸に隸かしむ〕

「赤壁賦」（蘇軾「前赤壁賦」）に、「明月を抱きて長に終えん」とあり。

とあり。

### 風簾檐

〔窺牆亭の北面に構う。又た檐外に竹林有り〕

「此君軒賦」（楊万里「清虚子此君軒賦」）に曰く、「風の竹を動かす有り。簾瑟の声を聞き、欣然として食を忘る」と。

### 愛棲軒

〔風簾檐の傍らに属く。倭邦の禽鳥を棲ましむ〕

劉長卿の詩（「小鳥篇 上裴尹」）に、「主人の庭中 喬木蔭え

ば、此の清陰を愛して棲宿せんと欲す」とあり。

鰺鳴（異域（外国）の禽を愛づるの堂なり。故に中華の家図に倣いて、

之れを修造す。幸いにして唐製の額を得、「和鳴」の字有れば、之れを掲げて之れを称す」

劉斌の詩（『送劉散員、同賦陳思王詩、得『好鳥鳴高枝』』）に、「春林已に自ら好く、時鳥復た和鳴す」とあり。

代璋弄（夷狄の遊翫の器を置く）

詩（『詩經』小雅・斯干）に曰く、「男子生まるれば則ち之れ璋を弄せしむ」と。此の亭に異域（外国）より伝来せし彈丸有り。弄璋の義を取りて之れに代え、焉れに名づく。

経史の堆を窺う者、其の要を提す。園林の繁きを過る者、其の芳を拾う。観頤荘は、城西の別居なり。園囿は大なるに非ず、台閣は美なるに非ず。山水を愛でて山水に止まらず、花木を玩でて花木に偏らず。心に適いて吟じ、心を養いて観る。逍遙緩歩の間、記して一軸を成す。嗚呼、才を斗筭に探ね、詞を瓦礫に纂むれば、樗散の大なるが如く、荆棘の繁きが如し。巻きて堆を成すも、開きて見るに倦み、読む者をして難過（難儀）せしめ、吟ずる者をして辨ぜざらしめん。此に於いて品題を拾い、小録を附す。冀わくは騷人韻士の之れを賞詠し、之れを潤色するを得て、藝術に頤養するを助け、歛声を林泉に添えんことを。

元禄壬午（十五年）仲冬（十一月）の日

肥侯拾遺補闕 藤貞伯固

致徳斎主人 英を摘みて自ら録す

印記（なし）

#### 【注】

- (1) 易の六十四卦の一つ。
- (2) 易の卦の最上位の陽爻。
- (3) 『易経』の「頤卦」上九爻に見える語。
- (4) 象伝。易の卦や爻の象徴する内容に対する解釈。
- (5) 『易経』の「頤卦」上九爻の象伝に見える語。
- (6) 北宋・程頤の『伊川易伝』。
- (7) 『伊川易伝』卷二の「頤卦」に見える語。
- (8) 周・春秋・戦国時代の一里は約四百五メートル。したがって七十里は約二十八・四キロメートル。
- (9) 『孟子』梁惠王下篇の故事を踏まえる。原文は次のとおり。「齊宣王問曰、文王之囿、方七十里、有諸。孟子対曰、於伝有之。曰、若是其大乎。曰、民猶以為小也。曰、寡人之囿、方四十里、民猶以為大、何也。曰、文王之囿、方七十里、芻蕘者往焉、雉兔者往焉、与民同之、民以為小、不亦宜乎。臣始至於境、問国之大禁、然後敢入、臣聞郊関之内、有囿方四十里、殺其麋鹿者如殺人之罪、則是方四十里為阱於國中、民以為大、不亦宜乎。」
- (10) 才能に恵まれない者が、苦心して物事の道理を知り、ひたすら努力を重ね実践して徳を身につけることをいう。『中庸章句』第二十章に、「或生而知之、或学而知之、或困而知之。及其知之一也。



或安而行之、或利而行之、或勉強而行之。及其成功一也」とあるのを踏まえる。

- (11) 人がふみ行うべき五つの道。すなわち「父義」「母慈」「兄友」「弟共(恭)」「子孝」(『春秋左氏伝』文公十八年)、または「父子有親」「君臣有義」「夫婦有別」「長幼有序」「朋友有信」(『孟子』滕文公上篇)。

- (12) 九つの原則。すなわち「修身」(身を修む)、「尊賢」(賢を尊ぶ)、「親親」(親に親しむ)、「敬大臣」(大臣を敬う)、「体群臣」(群臣を体する)、「子庶民」(庶民を子しむ)、「來百工」(百工を來う)、「柔遠人」(遠人を柔く)、「懷諸侯」(諸侯を懷く)。『中庸』第二十章には「凡為天下国家、有九經」とあり、九經を天下や国をうまく治めるための原則とする。

- (13) 「建極」とは根本の道徳を定める意。

- (14) 「格物致知」のこと。『大学』の一節、「致知在格物、物格而知至」に由来。後漢の鄭玄は、「知を致すは物を格すに在り」と読み、事柄の善悪は人の好みに従ってもたらされるものであると解釈した(『礼記注疏』)。一方、南宋の朱熹は、「知を致すは物を格すに在り」と読み、外在のあらゆる事物の理に至り尽くして知識を極め、客観的な理を獲得することが道徳の基礎となると解釈した(『大学章句』)。また、王守仁(陽明)は、「知を致すは物を格すに在り」と読み、心に生まれながらに備わる道徳意識(良知)を十全に發揮させるには、事象ごとに生じる自己の主體的な意識を是正することが必要であると解釈した(『伝習録』上)。他にも諸説ある。

- (15) 『論語』憲問篇の言葉。

- (16) 『中庸章句』第二十章、朱熹の注に「達道者、天下古今所共由之路、即書所謂五典、孟子所謂父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、是也」とあるのを踏まえる。「達道」とは世間一

般に通じる決まり、すなわち君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の五倫の道。

- (17) 『中庸章句』第二十章、前注の引用箇所後に、「知、所以知此也。仁、所以体此也。勇、所以強此也。謂之達德者、天下古今所同得之理也」とあるのを踏まえる。「達德」とは世間一般の人々に常に行われるべき徳。

- (18) 『中庸』第九章に「凡為天下国家有九經、所以行之者一也」とあり、朱熹の注は「二者、誠也。一有不誠、則是九者皆為虛文矣。此九經之実也」(『中庸章句』第二十章)とするが、綱茂は「誠」を「仁」に置き換えている。

- (19) 『中庸』第八章に「子曰、好学近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇」とある。

- (20) 『中庸』第八章に「天下之達道五、所以行之者三。曰、君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也。五者、天下之達道也。知仁勇三者、天下之達德也。所以行之者一也」とあるのを踏まえる。

- (21) 『論語集注』学而篇に、朱熹の言葉として「愚謂、力行而学文、則無以考聖賢之成法、識事理之当然」とあるのを踏まえる。

- (22) 「孝」は親に孝行すること。「弟」は兄または年長者に従順に仕えること。「慈」は目下を慈しむこと。

- (23) 「頤」は養う意。『易経』の「頤卦」彖伝に「觀頤、觀其所養也」とあり、「觀頤」とはその養うところを見ることであるとする。

- (24) 程頤『伊川易伝』卷二、「頤卦」に見える語。

- (25) 北宋・徐仲車「淮之水」に、「淮之水、淮之水。春風吹、春風洗。青於藍、綠染指。魚不來、鷗不赴。激激灑灑天尽头、祇見孤帆不見舟」とあるのをいう。

- (26) 北宋・欧阳脩「醉翁亭記」に見える句。原文は「佳木秀而繁陰。」

- (27) 北宋・蘇軾「廬山二勝・開元漱玉亭」詩に見える句。

- (28) 唐・李嶠「松」詩に見える句。

(29) 『詩經』大雅・卷阿に「鳳凰鳴矣、于彼高岡」とあるのを踏まえる。

(30) 出典未詳。

(31) 南朝宋・謝靈運「石壁精舍還湖中」詩に見える句。

(32) 『漢書』卷六「武帝紀」に、「(元封二年)六月、詔曰、甘泉宮内中産芝、九茎連葉、上帝博臨、不異下房、賜朕弘休、其赦天下、賜雲陽都百戸牛酒。作芝房之歌」とある。

(33) 「謝庭蘭玉」とも。家門に栄光をもたらす子孫を称える言葉。『晋書』卷七十九「謝安伝」の故事に由来。原文は次のとおり。「玄

字幼度。少穎悟、与從兄朗俱為叔父安所器重。安嘗戒約子侄、因曰、子弟亦何豫人事、而正欲使其佳。諸人莫有言者。玄答曰、譬如芝蘭玉樹、欲使其生於庭階耳。」

(34) 底本では「古」に作るが、文脈から考えれば明らかに「右」の誤写であるため、「右」に改めて書き下した。

(35) 白居易の詩句とされているが、実は唐・錢起の「藍田溪雜詠十二首・古藤」に見える句。

(36) 西晋・陸機「招隱詩」に見える句。

(37) 『詩經』小雅・綿蜜に見える句。原文は「綿蜜黃鳥、止于丘隅。」

(38) 唐・長孫佐輔「尋山家」詩に見える句。

(39) 東晋・陶淵明「飲酒」第五首の「此中有真意、欲辨已忘言」二句をいう。

(40) 形が牛の顔に似た朽木を、牛頭人身とされる神農(三皇の一人)に見立てたということか。

(41) 常山に住む蛇は、頭を打たれば尾が助け、尾を打たれば頭が助け、胴を打たれば頭と尾が一致して助けたという『孫子』九地篇の故事から、物事の筋道、文章の流れ等が、首尾相応じて構成が緻密であることをいうのであろう。

(42) 『孟子』尽心上篇の「觀於海者難為水、遊於聖人之門者難為言。

觀水有術、必觀其瀾」及びこの句に対する後世の人々の注釈を踏まえていよう。例えば、北宋の孫奭はこの句を、「以其人之觀書亦若是也。言觀書亦當觀其五經而已矣。五經所以載聖人之大道者也」(『孟子注疏』所引)と解釈している。引用文の意味については、現代語訳編の注(14)を参照。

(43) 「壺中天」(『後漢書』費長房伝)の故事を踏まえるか。

(44) 駿馬が縦横に駆けめぐる様子。後漢の張衡「東京賦」に、「龍雀蟠蜿、天馬半漢」とある。

(45) 若蘭は前秦の竇滔の妻、蘇蕙の字。蘇蕙は回文詩の始まりとされる錦の「璇璣図詩」を織って夫に寄せたとされる。『晋書』列女伝・竇滔妻蘇氏にその故事が見える。

(46) 唐・杜牧「山行」詩の「停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花」を踏まえる。

(47) 「張騫乘槎」の典故を踏まえる。西晋の張華『博物志』卷十、『藝文類聚』卷八、南朝梁の宗懐『荊楚歲時記』などに載っており、南宋の胡仔「苕溪漁隱叢話前集」卷十一、杜少陵六は、『荊楚歲時記』の記述を引いて次のように記している。「張華博物志云、漢武帝令張騫窮河源、乘槎經月而去。至一処、見城郭如官府、室内有一女織、又見一丈夫牽牛飲河、騫問云、此是何処。答曰、可問嚴君平。織女取槎機石与騫而還。後至蜀問君平、君平曰、某年月日客星犯牛斗。所得槎機石、為東方朔所識、並其證焉。」

(48) 井欄に裝飾を施した井戸。美しい井戸。ここでは井戸の美称。

(49) 恵山泉。唐・陸羽の『茶經』に「天下第二泉」と記された名水。中国江蘇省無錫市郊外の恵山の麓にある。

(50) 中国福建省建甌県にある地名。茶の名産地。

(51) 釣り鐘。中国の古い伝説で、音楽を掌る鳧氏が鐘を作ったとされることからこのようにいう。『周礼』考工記・鳧氏の項に見える。

(52) 「呂」と「律」はそれぞれ陰の六音と陽の六音を指すので、ここでは陰陽が替わること、つまり夜と昼が交替することをいうか。

(53) 『詩経』の六つの分類。すなわち風・雅・頌・賦・比・興。

(54) 一程は比較的に近い距離。

(55) 南宋・胡銓「和林靖先生梅韻」第四首の詩句。

(56) 唐・陸龜蒙「襲美初植松桂偶題」詩に、「煙格月姿曾不改、到今猶似在山中」とあるのを踏まえる。

(57) 北宋・蘇軾「種松得徠字」詩に見える句。

(58) 「龍鳳団」とは最上級の茶。北宋・仁宗の時代に作られた団茶で、圧搾して龍と鳳凰の模様を象ったとされる。欧陽脩の「帰田録」等に見える。

(59) 北宋・梅堯臣「依韻和杜相公謝蔡君謨寄茶」詩に見える句。

(60) 唐の開元年間に都長安の興慶宮にあった池の名。

(61) 興慶池の東北側に沈香亭があり、その前に数種の牡丹が植えであった。玄宗と楊貴妃がここで花見をした時、李白が玄宗に命じられて、かの有名な「清平調」を詠み、それを李龜年が歌にしたというエピソードで知られる。

(62) 「魏紫」と「姚黄」は欧陽脩の「洛陽牡丹記」に見える最高級の牡丹の品種。

(63) 「国色天香」は牡丹の別称。国一番の美しさと天下第一の香りをもつという意。

(64) 欧陽脩の「洛陽牡丹記」を踏まえた表現。

(65) 陶淵明の「五柳先生伝」を踏まえた表現。彭沢は中国江西省にある地名。陶淵明がかつてこの県令を務めたので、陶淵明のことを陶彭沢ともいう。ただ「五柳先生伝」は、陶淵明が彭沢の県令を辞し、故郷の潯陽（江西省九江市）に隠遁した後の作である。

(66) 「無心雲起」「有声鳥帰」は、陶淵明「歸去來兮辞」の「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還」を踏まえた表現か。

(67) 二月上旬と八月上旬の丁ひのとの日。

(68) 浮き草と白ヨモギ。供え物をいう。

(69) 稽首は、膝を屈し、頭を地面にしばらくつけて敬礼すること。頭を地面に打ちつける頓首とともに最も重い礼。拜手は、跪いて両手を地に伏せ、頭を手の上にのせてお辞儀をすること。

(70) 「翰墨神仙」とは前漢の神仙殿のことか。唐・李肇『翰林志』に、「漢制、尚書郎主作文書起草、更直建礼門内。（中略）建礼門内得神仙門、神仙門内得光明殿、神仙殿。自門下省、中書省、蓋比今翰林之制略同而所掌輕也」とあり、神仙殿は唐の翰林院に相当するものであったと考えられる。なお「道家蓬萊」は「道家蓬萊山」のこと。つまり後漢の宮中にあった蔵書庫、東観の異名。『後漢書』卷五十三の「竇章伝」に、「是時學者称東観為老子蔵室、道家蓬萊山」とあり、唐・李賢の注に、「老子為守蔵史、復為柱下史。四方所記文書皆歸柱下。事見史記。言東観経籍多也」とある。したがって、ここではいずれも豊富な蔵書をいう。

(71) 唐・王穀「暑日題道辺樹」詩に見える句。

(72) 正統ではない教え。聖人の道ではない別の学説。

(73) 「観頤莊記」附録編における「雲捧樓」の説明には「王介甫詩」とあるので、北宋・王安石（字は介甫）を指すと思われるが、誤写か。ちなみに「平甫」は同じく北宋の人、王令の字。なおこの詩句は王安石の詩には見あたらず、同じく北宋の人、楊蟠の「甘露寺」詩に見える。

(74) 「観頤莊記」附録編の「王子瑞籬」の説明を参照。

(75) 『詩経』小雅・鶴鳴に「鶴鳴于九臯、声聞于野」とあるのを踏まえる。

(76) 「念茲在茲」に同じ。ある人またはあることが心に刻まれて忘れられないことをいう。『書経』大禹謨篇に「帝念哉。念茲在茲、罔茲在茲」とあるのに由来。

(77) 一切は両手を左右に伸ばした長さ。約一・五メートル。

(78) 「窺牆」の出典については、「観頤莊記」附録編の「窺牆亭」の項目を参照。

(79) 南朝梁の劉緩の作品とする説もある。

(80) 蘇軾「前赤壁賦」の「抱明月而長終」を踏まえる。「観頤莊記」附録編の「抱明樹」の項目を参照。

(81) 木の枝葉の繁茂するさま。

(82) 漢代の人。仙術を学んだが、過ちを犯したので罰として月中の桂を切らされたという。

(83) 唐の玄宗が夢の中で月の広寒宮に遊んだことを踏まえるか。唐の柳宗元『龍城録』所収「明皇夢遊広寒宮」に次のようにある。「開元六年、上皇与申天師、道士鴻都客、八月望日夜、因天師作術、三人同在雲上遊月中。過一大門、在玉光中飛浮、宮殿往来無定、寒氣逼人、露濡衣袖皆湿。頃見一大宮府、榜曰、広寒清虚之府。其守門兵衛甚嚴、白刃粲然、望之如凝雪。時三人皆止其下、不得入。天師引上皇起躍、身如在煙霧中。下視王城崔巍、但聞清香鬱鬱。視下若万里琉璃之田。其間見有仙人道士、乘雲駕鶴、往来若遊戲。少焉、步向前、覺翠色冷光、相射目眩、極寒不可進。下見有素娥十餘人、皆皓衣乘白鸞往来、舞笑於広陵大桂樹之下。又聽樂音嘈雜、亦甚清麗。上皇素解音律、熟覽而意已伝。頃天師亟欲帰、三人下若旋風、忽悟若醉中夢廻爾。」

(84) 『古今事文類聚』前集卷一、天道部・月、「随至月中」に「玄洲之南、以水精為月、刻瑤為兔。翟乾祐、与十許人翫月。或問、月中竟何所有。乾祐曰、随我手看之。月規半円、瓊樓玉宇滿焉」とある。

(85) 「四時」は朝、昼、夕、夜。「九乳」は鐘。鐘の表面に九つの突起があることによる。

(86) 唐・徐堅等撰『初学記』卷十五、樂部下・鐘「九乳」に見える

語。但し『初学記』の原文には「君子鑠金為鐘、四時九乳。是以撞鐘以知君、鐘調則君道得」とあり、『観頤莊記』では「以知君」三字が省かれている。

(87) 能因法師の和歌「山里にまかりてよみ侍りける」に、「山里の春の夕暮きてみれば入相の鐘に花ぞ散りける」とあるのをいう。

(88) 唐の張説「山夜聞鐘」に、「夜臥聞夜鐘、夜靜山更響。霜風吹寒月、竚篠虚中上。前声既春容、後声復晃盪。聴之如可見、尋之定無像。信知本際空、徒掛生滅想」とあるのをいう。春陵は現在の中国湖北省棗陽市、あるいは湖南省永州市寧遠県。張説は岳州刺史を務め、長安と岳州の間を往還しているので、ここでは湖北省の春陵と見られる。

(89) 『周礼』の注釈を書いた鄭玄のことを指すか。

(90) 注(51)を参照。

(91) 自分を謙遜するという語。

(92) 南宋・楊万里「清虚子此君軒賦」を踏まえる。「此君」は竹のこと。東晋の王徽之が、庭に植えた竹を「此君」と呼んだことに因む。『世説新語』任誕篇に見える。

(93) 額や書物の表紙に題字を書くこと。

(94) 孔子の弟子、公冶長は鳥の言葉が聞き取れたという。南朝梁・皇侃『論語義疏』所引『論釈』に見える。

(95) 『徒然草』第百二十一一段に、「王子猷が鳥を愛せし、林に楽しぶを見て、逍遙の友としき。捕へ苦しめたるにあらず。凡そ『珍らしき禽、あやしき獸、国に育はず』(『書経』旅獒篇の「珍禽異獸、不育于国」に由来)とこそ、文にも侍るなれ」とあるのを踏まえるか。

(96) 『詩経』小雅・斯干に、「乃生男子、載寝之床、載衣之裳、載弄之璋」とあるのをいう。「璋」とは、上部が尖り下部が方形の玉器である「圭」を、縦に半分に割った玉製の笏。

(97) 底本は「観頤、貞吉」に作るが、「頤、貞吉」の誤り。

(98) 易において卦全体に対して判断した言葉。

(99) 本来はこの詩句の後に「祇だ孤帆を見るのみにして舟を見ず」と続く。注(25)を参照。

(100) 「仙郎」は唐の尚書省の郎中・員外郎に対する習慣的な呼称。ここでは沈東美員外を指す。

(101) 明・陳仁錫纂輯『潜確居類書』卷九十八、「芭蕉・鳳尾蕉」の条に見える。

(102) 唐・孟浩然の「臨洞庭上張丞相」詩に、「氣蒸雲夢沢、波撼岳陽城」とあるのを踏まえる。

(103) 蜀江の錦のこと。つまり古代中国の蜀(四川)より産した良質の錦織物を指すが、蜀江の水で糸を染めて織ったと伝えられることから、このように称する。緋地に黄・藍・緑などを交えて、連珠円または格子内に花文・獸文・鳥文などの文様を配したの(蜀江文)が特徴的であり、日本にも輸出された。日本では蜀江錦、蜀錦などともいう。また、京都の西陣より産する、蜀江文を模した錦を指すこともある。

(104) 中国の八人の仙人。鍾離・張果老・呂洞賓・李鉄拐・韓湘子・曹国舅・藍采和・何仙姑。ただし、鍋島綱茂筆「八仙人図」(徴古館蔵)では、南極老人を含めて八人の仙人が描かれているため、右記の八仙のうち一仙が欠けていると見られる。

(105) 唐・蘇鶚『杜陽雜編』卷下に見える。原文は次のとおり。「元載末年、造芸暉堂於私第。芸暉、香草名也。出于閩国。其香潔白如玉。入土不朽爛、春之為屑、以塗其壁。故号芸暉焉。」

(106) 長さ三百六十弓を一里とする。したがって一弓は約一・一メートル。

(107) 注(54)を参照。

(108) 「応護」は仏教用語。衆生の祈願に応じて、仏や菩薩が守り助

けることをいう。

(109) 注(77)を参照。

(110) 斗筭は一斗入りの枘きと一斗二升入りの竹製のかご。量が少なかったとえ。転じて才能が乏しいことをいう。

(111) 瓦礫は瓦と小石。破壊された建造物の破片など。転じて値打ちのないもの、つまらないもののたとえ。

(112) 樗散は樗櫟散木の略。つまり樗にわうしと櫟くめきと散木。いずれも役に立たないもの。

現代語訳編



## 「観頤莊記」本編

【口絵賛】『易経』の頤卦いかの上九爻こうに、「大きな川を渡るような大事を執行するにもよろしい」とあり、その象伝しやうでん（易の卦や爻の象徴する内容に対する解釈）に、「危険であるけれども吉である。これはやがて大いに慶よろこびを得られるということである」とある。そして『伊川易伝いせんえきでん』（北宋の思想家・程頤ていの著作、伊川は程頤の号）には、「殷の名宰相であった伊尹や周の摂政であった周公旦しゅうこうたんのような立派な政治家たちは、どうして政務に慎み勤めなことがあっただろうか（彼らはみな政務に怠ることなく勤め励んだのだ）」（「頤卦」とある。

【題字】「観頤莊にて義を推し進める」 致徳斎が篆刻した

印記 略（翻字編を参照）

周の文王の御苑ぎょえんは、四方七十里（約二十八・四キロメートル）あったが、民はこれを狭小と見なした。一方、戦国時代の斉の宣王の御苑は、四方四十里（約十六・二キロメートル）であったが、民はこれを廣大と見なした。それはいかなる理由によるものか。周の文王の御

苑は天下の民とともに楽しむものであったが、斉の宣王の御苑は自分だけが楽しむものであったからだ。今、園（観頤莊）を開いて、思いを述べる理由は、周の文王と斉の宣王の間をとるのではなく、才能に乏しい自らを省みて苦心して物事の道理を知り、ひたすら努力を重ねて徳を身につけたいと思うからである。わたしは国土を守り、士と民を教育するために、「父の義、母の慈、兄の友、弟の恭、子の孝」といった、人のふみ行うべき五つの道を称揚し、「身を修め、賢を尊び、肉親に親しみ、重臣に敬意を払い、群臣に気遣い、庶民を慈しみ、百工をねぎらい、他国の人を安んじなつかせ、諸侯を安心させる」といった、国をうまく治めるための九つの原則を正しく守り、そのことによって根本となる道德規範を定めなければならない。しかしわたしは文を学ぶのに明敏ではなく、事に臨んでも明晰ではない。ただ畏敬の心を保ち、格物致知①の教えを思い、礼を整え、仁を求めて、士と民を安んじたいと思う。

したがって自分の身を修めること、これに頼らなければならない。

『論語』（憲問篇）に、「己の身を修めて天下万民を安んずることは、堯・舜ぎょうしんのような聖天子でさえもこれに苦勞されたのである」と書いてある。尤も至極であることよ、この言葉は。困難であることよ、この道をふみ行うことは。ああ、万分の一でもこれ（己の身を修

めて民を安んずる政治」を国に施したいと切に願う。何を道というのだろうか。何を徳というのだろうか。『中庸章句』（第二十章）にいう「達道<sup>②</sup>」とは、天下のすべての人が抛りどころとするものであり、天より授けられた本来の性質である。「達徳<sup>③</sup>」とは、天下のすべての人が身につけるべき道徳であり、そのために力を尽くして自己修養に励むべきである。実に、天下や国をうまく治めるための九つの原則を考えれば、一つに集約される。それは、「仁」である。仁とは、人間の本来の性質である。仁を行うとは、物事を知ることである。つとめて物事を知るとは、勇敢なことである。そうであれば、また道であり、徳である。つとめて行っただけで文を学ばなければ、聖賢の模範を失ってしまう。そうすると、一体どうして物事の道理を知ることができようか。わたしは朱熹がいつも熱心に学び、怠ることがなかったと聞いている。だから休日<sup>かんよう</sup>に文意を学び、自らの身命を涵養<sup>かんよう</sup>し、「親に孝行し、年長者に従順に仕え、目下の者を慈しむ」といった三つの道徳を守って民衆を教え導けば、それは仁をふみ行うことに力を尽くす始まりとなるであろう。

そこで、城郭（佐賀城）の西側に別荘を構え、「観頤<sup>かんい</sup>荘」と名づけた。『易经』にいう「頤<sup>い</sup>（養うこと）を觀<sup>み</sup>る」という言葉の意味をとったのである。『伊川易伝』（卷二）には次のようにある。「養を推し進

める意義は大きく、天地が万物を育<sup>はぐ</sup>み、聖人が賢者を養<sup>つちか</sup>ってその恩沢を万民に及ぼすに至るほどである。人が命を大切にすること、身体を養うこと、道徳を涵養<sup>かんよう</sup>すること、人を養育することとともに、すべてが頤養<sup>いよう</sup>の道である。」これがそのもとづくところであり、また養うところである。

園には遠景と近景の興趣がある。山なみは西北に列<sup>つら</sup>なり、田畑は東南に連<sup>つら</sup>なっている。これらを遠く見渡せば詩ができあがり、園の中を散策すれば養生になる。そこで文房の四友（筆・硯・紙・墨）を携え、園林の数々の珍しい景觀を書きとめようとして、これを陶泓<sup>とうかう</sup>（硯）に相談したが、黙り込んで何も言わない。またこれを陳玄<sup>ちんげん</sup>（墨）に尋ねてみたが、研磨するだけで応じてくれない。ともに語つてくれるのは、毛穎子<sup>もうえいし</sup>（筆）である。

静かな池の水は、「太陽の光を受けてきらめき、藍よりも青く、指までその緑に染まってしまうさうだ」（北宋・徐仲車<sup>じょちゅうしや</sup>「淮之水」）。徐仲車は来ないが、彼の詩がここにある。そこでこの池を「灩藍池<sup>えんなんち</sup>」と名づけた。そこに臨<sup>い</sup>む幾重<sup>いくえ</sup>にも重なった岩山には、珍しい木々が青々と茂り、不思議な形の石が複雑な体をなして輝いている。北宋の文人・歐陽脩<sup>ようしゅう</sup>はなんと「美しい木々が高く伸びて、豊かな陰をつくっている」（「醉翁亭記」）と記したではないか。これをもって「繁陰山<sup>はんいんざん</sup>」と名づけ

た。

ここで、山水によって数多の興趣が引き起こされ、仁と智を尋ね、永遠の春を綴る。毛穎子（筆）は書き記し、楮国公（紙）はそれを載せる。山と山の間を仰ぎ見れば、滝が流れ出ている。北宋の文人・蘇軾が詠んだ「青玉の峡谷を引き裂いて、二頭の白龍が飛び出る」（廬山二勝・開元漱玉亭）とは、まさにこれをもって見ることができ。したがって「玉飛龍」というのは、もつともな命名ではないだろうか。中洲の畔には何があるのか。そこには緑の樹があり木陰があり、四季の移り変わりに耐え忍んで、樹齢は千年にも等しい。そこで「仙洲松」と名づけたのである。「百尺ほど高く伸びて枝の陰が合さり、千年も生き続けて大きな木陰を拡げる」（唐・李嶠「松」）あの姿は、李嶠が見たものではないだろうか。

次第に山を下りれば、小道が川と沢の石を廻り、その先に小さな欄干を回らした屋敷がある。これを「漣曳檻」と呼ぶ。近くの川には鯉が生き生きと泳ぎまわり、さざ波がゆらゆらと揺れている。屋敷の後ろに岡が有り、「鳳尾岡」と呼ぶ。枝葉を青々と茂らせているのは、鉄蕉である。またの名を「鳳尾蕉」と言う。岡の名はこれに因んでいる。しかしあの高い岡に、鳳凰の鳴き声がしないのも、また不思議なことである。

水辺を望めば枯れた葛が曲がりくねっており、その形はまるで龍が躍っているかのようである。そこで「濟旱木」（旱害から民衆を救う木）と名づけた。蘇軾の詩に、「空に昇って旱天の慈雨を降らせ、旱魃に苦しむ民衆を助ける、龍だ、龍だ、飛躍する龍だ」（出典未詳）とあったなあ。民衆を救う自然界の造化をも、またこれに託したのであろう。水際に高殿を建て、「含清閣」と名づけた。六朝の詩人・謝靈運が詠んだ「山川は清らかな日光を含む」（「石壁精舍還湖中」という句から取った名前である。水に映った木々の青々とした影と、サラサラと流れる水の音が耳目を楽しませてくれる。建物の左側の水際の近くに、たまたま靈芝が自生し、キラキラと輝いて、他の草木とは類を異にしている。靈芝が生えるのは世がよく治まっていることの吉兆である、かつて聞いたことがある。漢の宮廷では、後宮に「九茎連葉」（九本の茎の葉がつながったもの）の靈芝が生えた時、これを重んじて「芝房の歌」を作った。「謝庭比玉」とは、子孫が優秀であることを称える言葉である。そこで、この靈芝を「玉生芝」と名づけた。めでたくて喜ばしいものと見なすことができよう。

この高殿を通り過ぎて、右の方を見れば、長い木棚に枝を垂らし、藤の花が咲いている。一面の紫色は、まるで老子を迎えようとで

もしているかのようである。唐の文人・白居易の詩に、「蔓を引いて林を出て、糸のような房を垂らして、巢籠りしている鶴を覆い隠す」とあるのは、この紫色の花を指すのではないだろうか。そこで「蔓綸藤」と名づけた。また水際に小屋が建っており、これを「漱玉窩」と呼ぶ。西晋の詩人・陸機が詠んだ「飛泉（滝）が石を洗いながら音を立てる」風景を、ここで見るのできるのである。

天山は素晴らしい景色をあつめて、霞をたなびかせている。龍造寺時代の館の跡地は高い盛り土を残し、その上に青松が鬱蒼と茂っている。今津浦は海岸に沿って長い堤防を連ね、遠くから来た船や遠くへ行く船が、地を裂くように出入りしている。龍門山は高く緑をあつめ、満月が林を分けるように昇って地上を照らす。里外（厘外）の市場が近くにあり、茅葺き家の軒が高低・長短ともに不揃いに入り交じっているのが見える。野田村の田畑は果てしなく広がっており、その上を飛んでいく雁の甲高い鳴き声が聞こえてくる。砥川山は緑の木々を聳やかし、夕陽に映えている。本庄村では稲が穂を連ね、農夫が刈り入れに忙しい。これが八景のあらましであり、園の外四季の景色である。物事を観察する道理も、これによって知ることができよう。

漱玉窩を通り過ぎ、目を凝らして遠くを眺めれば、奥深い山は鬱

蒼としており、鳥の鳴き声が絶え間なく聞こえてくる。いわゆる「鶯が丘の斜面に止まっている」（『詩経』小雅「綿蛮」）ものだなあ。そこで「止鶯山」と名づけた。最もよい場所は、人に知られないところに在る。鶯がここに羽を休める理由である。このような深い道理を考えながら見るのできる。

小道を過ぎたら、南側に一軒の茶屋が設けられている。これを「歇涉店」と名づけた。唐の詩人・長孫佐輔が、「一人で山家を訪れ、ひと休みして再び山道を歩いた」（『尋山家』）と詠んだのに因む。園に遊びに来た人は、ここに至れば立ち寄ってしばらく憩うことができるのである。東側にある長い橋を渡れば、高い楼閣がある。これを「真意楼」と名づけた。頭を上げて北側に聳える山なみを仰ぎ見、頭をたれて南山を思い描けば、「ここにこそ真意（自然の興趣）があるのだが、それを言葉で言い表そうとしてもすでに言うべき言葉を忘れてしまった」（陶淵明「飲酒」第五首）。そこで陶淵明の意趣をとり、この名にしたのである。真意楼の近くの東側に、また茅葺きの草庵をひとつ結んだ。そしてこれを「欲辨舎」と名づけ、「真意楼」に通じるようにした。これはわたしが佳趣（自然の興趣）を深く理解したいと思ったからである。

真意楼の楼上の柱と壁には、あちこちに朽ちた木や枯れた葛が

扁額へんがくの代わりに掲げられている。一つめを「見牛木けんぎゅうぼく」という。その面おもてが牛の顔に似ていることから、求仁の意味を見ることができるのである。<sup>(13)</sup>二つめを「蟠龍木ばんりゅうぼく」という。その形が蟠わだかまる龍りゅう（今にも飛び上がりそうな龍）に似ていることから、物事の変化を推察することのできるのである。三つめを「常山靈じょうざんれい」という。常山の蛇が、頭を打たれば尾が助け、尾を打たれば頭が助ける、その姿に形が似ていることから、文章の筋道を論じることができるのである。四つめを「観瀾葛かんらんか」という。その紋様が整っていることから、物事の本末を悟ることができるのである。<sup>(14)</sup>五つめを「靈洞榿れいどうたい」という。中が空洞になっていることから、仙人の遊びを推察することができるのである（「壺中天」の故事）。事を言葉に託しているとはいえ、根拠がないわけではない。

四方を眺めると、背振山せふりさんが北側に聳そびえて、山頂に積もった雪が目すがすがに清々しい。雲仙岳うんせんたけは南側に横たわり、立ちのぼる煙が目すがすがを引く。太良岳たらだけは霧が斜めにかかり、西南の方向に見え隠れしている。西側の広大な田畑は、碁盤ごばんの目のように整然としており、綾絹あやぎぬの織物のように色とりどりに分かれている。穀物は雲のように連なり、農家の苦勞に感慨を催させられる。曲がりくねった川が四方をめぐるように流れており、その水面みなもは練絹ねぎぬのように風なぎ、また縮緬ちりめんのようにざざ

波を立てる。長い橋が川の流れを横断するようにかかっており、その形は龍のようであり、虹のようである。それに加えて、前の池は明るく輝き、満月は澄んだ清らかな光を放つ。入江の溪流は音をたてて流れ、両岸に咲く桃の花が波を赤く染める。うずたかく積み重なった岩は石段の近くにあり、そこを通れば岩からほとばしる滝のしぶきに驚く。砂を敷きつめた馬場が道路に面して開かれており、時折、調教される駿馬しゅんめが縦横に疾走する様子が見える。春になると花の咲く土手は錦を織りなしたように美しく、「璇璣図詩（15）」を織りあげた若蘭じやくらん（訓読編の注（45）を参照）の機はたを借りて彩いろどったかのである。秋になると楓の木が紅葉を風になびかせ、かの杜牧とぼくが「車を停めて、気の向くままに夕暮れの楓林の景色を愛でる。霜にうたれた楓の葉は、春の二月に咲く花よりもなおいつそう赤い」（「山行」）と詠んだように、風流人の車を停める。重なつて連なる山々に小道が数本分かれており、中にはおそらく仙界に通じる道もあるのだらう。野に流れる小川に舟を浮かべて、漢の張騫ちやうけんと同じく天の河に渡りたいものだ。欲辨よくべん舎しゃのほとりにある井戸は、朽くちることなく水が濁ることもない。しだれ桜が枝を長く垂らし、まるで短い釣瓶つるべの縄に代わるかのである。唐の陸羽りくうが『茶経』に「天下第一泉」と記した恵山けいざいの名水が近くにあり、茶の名産地である建溪けんけいもここに



ある。茶の香りと味を楽しむ時は、当然この井戸の清らかな水を汲む。遠くの寺院から城郭を隔てて、鐘の音が聞こえてくる。ちょうど夜と昼が替る時（卯・酉の時）、鐘の音を聞きながら風花雪月の自然の興趣を愛惜する。これらは真意楼の楼上における十五のことであり、園中の雅びな眺めである。『詩経』の六義（訓読編の注（53）を参照）の「風」（国風）は、これによって理解することができる。

真意楼を下り、杖をついて歩を進め、逍遙してしばらく歩けば、北側に「八仙堂」がある。南極老人を本尊として祭っている。古の言葉に、「国がうまく治まれば、南極星が現れる」という。堂の周りには、めでたく縁起の良い風と霞が漂っており、堂に近づけばまるで仁徳と長寿の仙界に登っていくかのようなのである。西側に茅葺きの建物があり、扁額には「蓬班」と書かれている。唐の詩人・盧全の茶歌に詠まれている、「蓬萊山は、どこにあるのか」（「走筆謝孟諫議寄新茶」という句に由来するものである。茶を味わい、客を招き、雅会を催す場所としている。

あそこに見える不思議な力をもつ梅の木は、その形が嶺のようであり、島のようにあり、扇のようであり、船のようである。見る角度によって異なる興趣を覚えさせ、魚を釣りあげるように次々と詩を釣る。そこで「釣詩梅」と名づけた。南宋の詩人・胡銓が詠んだ

「一年のうちでもっとも良いのは早梅の咲く時、その香りと可憐な姿が風情を引き寄せて巧みに詩を釣る」（「和林和靖先生梅韻」其四）とは、まさにここにあるのだ。堤の上を見やれば、若松が緑の葉を連ね、そこに月がかかり、靄を帯びている。蘇軾が「坐して待つ、二匹の龍蛇（松の木）が、清らかな木陰を南側の階段に満たすのを」と詠んだのは、まことにあの若松を愛したからだなあ。これに因んで「龍陰堤」と名づけた。百尺ほど高く伸びることを期待し、千年の齢を得んことを願う。

小道を回ると、北側に草庵が有る。「団香廬」という。茅葺きの屋根は丸い形をしており、庭石と門戸もまた同じである。満月の団（丸い形）であろうか、それとも真珠の団であろうか。実は龍鳳団（訓読編の注（58）を参照）を用いることをいうのである。北宋の文人・梅堯臣は「団茶の香りはすでに都の役所（中都府）に届いている」（「依韻和杜相公謝蔡君謨寄茶」と詩に詠んだ。「府」で「廬」を代えても、また風雅ではないだろうか。

ここを通り過ぎれば、道が曲がりくねっており、敷地が異なる。そして別にもう一本の小道があり、「興慶野」に通じている。そこには、唐の都長安の宮廷にあった「興慶池」に倣って、数種の牡丹を種えている。黄色とか紫色とかは、「魏紫」「姚黄」といった高級な



品種にぴったり合う。「天香」を招き、「国色」を愛する。そこで「興慶墅」と名づけたのである。また門が有り、扁額に「五柳門」とある。あでやかな牡丹の花を見て、またしなやかな楊柳に向き合えば、欧陽脩が「洛陽牡丹記」の中で牡丹の名産地としてほめ称えた洛陽の栄華と、彭沢の長官を辞し、隱遁して「五柳先生伝」を著した陶淵明の風雅が、一つの園の中に異なる土地を思わせ、千年を隔ててなお興趣を同じくする。また陶淵明が「歸去來の辞」に、「雲無心にして以て岫（山のほら穴）を出で、鳥飛ぶに倦みて還るを知る」と詠んだように、無心の雲がたち起り、囀っていた鳥たちはねぐらへと帰ってゆく。これらの風景があるからこそ、わたしは日々園の中を散歩し、思いを寄せるのである。

興慶墅のすぐ近くに、くねくねと曲がった小道を廻らせ、門と垣根で囲い、「至聖殿」を建造した。もともとは佐賀城の中に造営しており、二月上旬と八月上旬の丁の日に釈菜の儀式を行い、懇ろに蘋と藜を供え物として捧げていた。しかし城内の敷地が狭いので、聖殿をこの場所に移した。あえてここを園の景観にしなかったのは、国の幸いを願う神聖な場所だからである。輝いて高雅であり、厳かで威風がある。「由道門」と「声振門」は、敬礼して通らなければならない。至聖殿の傍らに長いわき部屋を造り、和漢

の書籍を納めた。漢籍の書庫を「芸暉閣」と名づけ、和書の書庫を「随圻府」と呼ぶ。翰墨の神仙、道家の蓬萊（訓読編の注(70)を参照）のように豊富な蔵書は、まことに千古のことを今日に見るものであるなあ。

ここを通り過ぎて、さらに自由気ままに歩くうち、大きな楠の陰に出会う。枝葉が豊かに繁っているので、その涼しい木陰に身を寄せたくなる。これを「濃陰廬」と呼ぶ。かつて唐の王穀の詩で読んだことがある、「あたり一面に広がっている濃い木陰が、ここから前に出るのを億劫にさせる」とは、まことにここにあるなあ。

また別の境内に入ると、「妙相堂」がある。普陀落の観音像を安置している。なおその境内をよく見れば、「羅漢堂」が造営されている。これは中国の石像である。聖人の道（儒教）ではない異端（仏教）を崇拜するのではなく、民衆の世俗的な信仰に委ねたものである。『書経』（泰誓上篇）に、「天は民をあわれむ。民が望むことに対して、天は必ずこれに従う」とある。これにもとづいて考えれば、民衆の信仰に合わせて仏像を安置することも、また自然と勧善懲悪の道となるのである。

歩いたり振り返って見たりしながら、水際をめぐれば、高樓が建っている。これを「雲捧樓」と名づけた。北宋の文人・王安石（字は介

甫)の「雲が楼台を捧げて天上に突き出させる」という詩句から取った名である。この楼閣に登って四方を見まわせば、視界は果てしなく高く広く開けている。近くに王子権現のためたく縁起の良い低い垣根が見え、神霊の尊い光を仰ぐことができる。大井樋には村々が連なっており、実った稲穂は秋の気配を色濃く帯びている。太陽の光が射し、恵みの雨が降り、農夫たちは野原にて手をたたいて舞い踊り喜ぶ。風に霽がたなびき、穀物はよく実っている。末次村を指さし、朝な夕なに眺める。八田村の方向に瞳を凝らせば、青松がすつくと立ち並び、春も秋も変わることなく、緑が雲のように連なっているのが見える。田野に舞い降りた鶴は声を合わせて鳴きかわし、まるで『詩経』の小雅「鶴鳴」の情景をくり広げんばかりである。ただ『詩経』の歌と異なるのは、鶴が奥深い沢にいたのではなく、目前の南里にいたことである。めでたく縁起の良い霽と霞が、徳善院を囲み、その靈光は国を覆い、千年に至るまで鎮護してくれることだろう。稲佐山は遠くにあり、雲を引き寄せ霽を帯びる。有明の月の美しい姿を愛で、詩境の奥深さを探し求めたくなる。かの寺井を遠く眺めれば、青海原が果てしなく広がっており、空が晴れれば近く視界に入る。あれは仙人の住む蓬萊であろうか、それとも瀛州であろうか、いつもあの場所に心を引かれる。どこへ行くのか、

早津浦に船が浮かんでいる。西に行く船、東に帰る船が、盛んに往來している。楼閣の上からの眺めに寄せて、船の中から見える風景を想像してみる。西側に聳える囊尾山は、夕陽の傾いた光を留め、あたり一面を照らす最後の微かな輝きを惜しむかのようなのである。朝日は広々と光を放ち、自然と遠く高くまで照らす。風と雲が様子を变え、阿蘇山が東に煙を吐く。これらはすべて雲捧楼の上から見える遠近の素晴らしい眺めであり、景色は十一のみをとり上げるものの、興趣は千にも百にも及んでいる。

ようやくこの楼閣(雲捧楼)を下りると、小道と小川が有る。その横に竹矢來を囲って、外国の珍獸を飼育している。『論語』(朱熹「論語序説」)に、「孔子が牧畜を掌る役人になると、家畜が繁殖した」と記されているので、孔子の徳の厚さにますます深い感慨を覚える。そこで「蕃育」の字を題した扁額を懸け、その慈愛をこれにことよせた。

やがてここを通り過ぎると、一本の川と一つの橋があり、「窺牆」と称する亭が有る。亭は聖殿の隣りに位置し、まるで数仞の扉の向こう側にある聖堂の中を窺おうとしているかのようなのである。また回廊を廻ると「玉鈞觀」が有る。「仙人の住む宮殿(月の宮殿)では雲の御簾が捲き上げられ、簾をとめる玉製の鈞(三日月)が露わになっ

ている」とは、盧仝の詩句である。これにもとづいて「玉鈎觀」と名づけたのである。

その傍らに月見台が築かれている。ここは月を眺めるところである。台上の座席のそばに帳が掲げられ、「抱明榭」の字が記されている。蘇軾のいう「明月を抱く」興趣とは、いつもここ（月見台）で体験できるものだなあ。また月の形をうつしとり、その中に白い兎を描き、周りを桂の樹で囲んだ。丸い月の明りに、桂の茂った枝葉の陰がある。吳剛（訓読編の注(82)を参照）の斧を借りて桂の茂った枝葉の間を通り抜け、戸を隔てて広寒宮（月の宮殿）の中の様子を窺いたいものだ（訓読編の注(83)を参照）。またかつて聞いた話では、道士の翟乾祐が、水晶をもつて月となし、玉を彫って兎にしたという。神仙の事跡は、辿ることができないわけではない。文芸の技に事寄せることができるのである。

この亭の苑の中に、鐘楼を一つ設けた。時刻を知るだけのためではない。古の言葉に、「君子は金属を鑄て鐘を作り、朝・昼・夕・夜に鐘の音を響かせる。鐘を撞いて、その音が整っていれば、君子の道を得たということである」とある。どうしてただいたずらに鐘楼を設けることがあるのか。そこで鐘の銘と序を次のように記した。「宇宙の造化、万物の動静は、ただ鐘の響きの中にある。それに加え

て、春が来て花が馨れば、能因法師の山寺暮天の和歌（訓読編の注(87)を参照）を思い浮かべ、秋の冷たい月の夜には、唐の張説の春陵静夜（訓読編の注(88)を参照）の興趣を求めて、この鐘楼の近くに茶店に遊び、朝と晩を告げる鐘の音が、人間の力によって鳴るのではなく、自然の力（霜風）によって鳴るのを聴く。つまりこの鐘楼は、私が誠意を保ち、真心を養い、この園に遊ぶ人を慰めるために設けたものである。そこで次のような銘を記す。鄭公（訓読編の注(89)を参照）は徳を抱き、晁氏は（訓読編の注(51)を参照）鐘を鑄た。この園が千年万年と続き、いつまでもこの鐘を見、いつまでも鐘の音を聴くことを願う。」時は元禄十五年（一七〇二）の冬であり、銘を記したのは不肖子（自分の兼称）である。

やがて林の小道を過ぎれば、竹林があつて風に揺れ、その音は、簫の音のようであり、また瑟の音のようである。南宋の詩人・楊万里の「清虚子此君軒賦」からとって、「風簫檐」と名づけた。穏やかにして雅びやかであり、雅びやかにして美しい音をたてる。その周りに茅葺き屋根の廊下が緩やかに廻らされ、竹の欄干が長く連なっている。そこに珍しい鳥たちが棲んでおり、それぞれの羽が互いに映え合って美しい。もともと外国から伝来した鳥である。「和鳴」と書いた扁額があつたが、いま珍しい鳥を手に入れたので、折

よくこの軒に掲げることができた。思いがけずに鳥が声を合わせて鳴きかわす喜びがあるものだ。またその傍らの小屋には、日本の鳥を集めて、「愛棲」の字を書いた扁額を懸けた。鳥がここに棲んでいることを愛おしむゆえの命名である。公治長（訓読編の注(94)を参照）でなければ、どうして鳥の言葉が聞き取れようか。また王徽之（訓読編の注(95)を参照）でなければ、どうして鳥の楽しみを知ることができようか。

鳥小屋の傍らに亭があり、これを「代璋弄」と呼ぶ。そこに置いてあるのは弾丸の玩具である。遊びに見立てるのには理由がある。『詩経』小雅の「斯干」に、「男子が生まれれば、璋（玉製の小さな板）を与えて遊ばせる」とあるではないか。その徳に見立てるのである。私には小さな娘がいる。女の子だからといって、道徳を教えないことはいけない。そこで璋の代わりにこれで遊ばせている。徳と寿命は天が延ばすものである。このことを思わないわけにはいかない。

これらはすべて園内の風景であり、わたしはこれらによって、生を養い、徳を養っている。どうして周の文王の御苑に擬える必要があるうか。またどうして斉の宣王の楽しみと比べる必要があるうか。「頤」の意義を考えれば、すでに充分である。「頤」の意義は、大きなところを言えば、天地が万物を育むことであり、小さなところ

るを言えば、園林にて心を涵養することの大切さである。道德心をわきまえれば、物事の道理を速やかに会得することができ、道の教えをわきまえれば、心と頭が明敏になりすぐに実行することができ、花と草木の筋目に、外見の美と内面の実を見ることができ、鳥の鳴き声に、夫婦や兄弟が仲良く楽しむことの大切さを感じ取ることででき、水の流れの豊かさに、大きな徳を知ることができ、山岳の厚重さに、仁徳と長寿を求めることができる。そして生を養うことができれば、年長者に仕えることができ、年長者に仕えることができれば、民衆に恵みを施すことができる。そうであれば、たとえ机上で「頤」の意義を論じ尽くしたとしても、園の中で「頤」を直接に観るのに及ぶだろうか。そこで別荘に「観頤」と名づけて、自らその由来を記した。

元禄十五年十一月某日

肥前侯拾遺補闕 藤貞伯固

致徳斎主人が、景色を選び、ここに言葉を並べる

印記 略（「解題」を参照）

## 「観頤荘記」 附録編

【口絵賛】『易経』に、「頤は、貞しければ吉なり」とあり、その彖

伝でん（易において卦全体に対して判断した言葉）には、「その

養うところを観ることである。天地は万物を養い、聖人は賢者を養ってその恩沢を万民に及ぼす。頤の卦の時々の意義はまことに広大である」とある。

【題字】「義を推し進め、すぐれた景観を選んで編む」

致徳斎が篆刻した

印記 略（翻刻篇を参照）

観頤荘かんいそう（佐賀城の西にある別荘の名である）

『易経』に「観頤」とある。程頤の『伊川易伝』に、「養を推し進める意義は大きく、天地が万物を育み、聖人が賢者を養ってその恩沢を万民に及ぼすに至るほどである。人が命を大切にすること、身体を養うこと、道徳を涵養することともに、すべてが頤養の道である」とある。

澁藍池えんらんち（観頤荘の居宅の前にある池である）

徐仲車の詩（「淮之水」）に、「藍より青く、指まで緑に染まっ

てしまいそうだ。太陽の光を受けてきらめき、天のはてまで広がっている」とある。

繁陰山はんいんざん（観頤荘の第宅の南にある築山である）

欧阳脩の「醉翁亭記」に、「美しい木々が高く伸びて、豊かな陰をつくっている」とある。

玉飛龍ぎよくひりゅう（繁陰山の岩の近くに滝がある）

蘇軾の詩（「廬山二勝・開元漱玉亭」）に、「青玉の峡谷を引き裂いて、二頭の白龍が飛び出る」とある。

仙洲松せんしゅうしょう（繁陰山の麓の中洲の畔に松が生えている）

蔡母潜の詩（「題沈東美員外山池」）に、「仙郎（訓読編の注（100）を参照）はすこぶる道を好み、池を掘ってその中に仙山の瀛洲を象った島を作った」とある。

止鷺山しろうざん（繁陰山の東にあつて、繁陰山と向かい合っている）

『詩経』（小雅・綿蛮）に、「（のどかに囀る）鷺が、丘の斜面に止まっている」とある。

漣曳檻れんえいかん（繁陰山の後、南側に屋敷がある。また池があり、鯉が生き生

きと泳いでいる。そしてこれを囲むように欄干がめぐらされている）

杜甫の詩（「重題鄭氏東亭」）に、「清らかな漣が水苔を揺ら

す」とある。

**含清閣**〔水際に沿って、繁陰山の畔に構えられている〕

謝靈運の詩〔石壁精舍還湖中〕に、「山川は清らかな日光を  
含む」とある。

**鳳尾岡**〔含清閣の前に、岡が有り、蘇鉄が栽えてある〕

『潜確居類書』に、「鉄蕉は、一名を鳳尾蕉という」とある。

**済草木**〔朽ちた木が龍の形に似ている。そこでこの木に手を加え、鳳

尾岡のあたりに置いた。その形はまるで龍が蟠っているよ  
うに見える〕

蘇軾の詩〔未詳〕に、「空に昇って早天の慈雨を降らせ、早魃  
に苦しむ民衆を助ける」とある。

**玉生芝**〔止鷲山の麓に、今年の秋、靈芝が初めて生え、水際に輝いて  
いる〕

謝安（謝玄の誤り）は、「謝家の子弟は、喩えてみれば靈芝や  
蘭、仙界の樹木が、階段の前の庭に生えているようなもので  
ある」と述べた。

**蔓綸藤**〔含清閣の西南に、紫色の藤の花が咲いているのが、漱玉窩と  
の間に見える〕

白居易の詩（錢起「古藤」詩の誤り）に、「蔓を引いて林を出て、

糸のような房を垂らして、巢籠りしている鶴を覆い隠す」と  
ある。

**漱玉窩**〔水際に面して建物が築かれている。この建物の中からの眺

望を、八つ拾う〕

陸機の詩〔招隱詩〕に、「滝が石を洗いながら音を立てる」  
とある。

## 漱玉窩の壁に記した「八景」

**天山晴霞**

西北の間に、天山が有る。霞が晴れば、高く険しい山が遠  
く姿を現し、木々が鬱蒼と茂っているのが見える。そこでこ  
れを奇観とした。

**館址蒼松**

龍造寺時代の館の跡地に、千本の松が、鬱蒼と茂って、古を  
見て、また今を見ている。これを城西のすぐれた景観とした。

**龍門升月**

龍門山は東にあり、俗に「宝琳院」と呼ばれる。綺麗な月が  
緑の木々を分けるようにして、林の端に昇る。これを満月の



美しい景観とした。

### 今津遠帆

今津浦は西に曲がっており、雲にまで届きそうな高い木々が横に連なっている。海岸を隔てて遠く風に帆をふくらませた船が往来するのが見える。

### 里外茅檐

西の方にしばらく進めば、里外（厘外）の市場がある。茅葺き家の軒が高低・長短ともに不揃いに入り交じっているのが見え、また商人たちが忙しく往来するのが見える。

### 野田寶雁

野田村の田畑は果てしなく広がっており、その上を飛んでいく雁が甲高く鳴いている。村里の家々を眺め、秋風の訪れに感慨をもよおす。

### 砥川夕陽

砥川山は西にあり、翠の屏風（林）が雲のように開かれている。その屏風の向こうに夕陽が落ちていく風景は、まことに詩を吟じながら眺めたいものである。

### 莊村農夫

遠く西の田畑を眺めれば、本莊（本庄）と称する村がある。

実った稲穂が雲のように連なり、農夫が収穫して穀物倉に収めている。

### 歇涉店

〔漱玉窩を通り過ぎ、漱玉窩と真意楼の間に憩う〕

長孫佐輔の詩（「尋山家」）に、「一人で山家を訪れ、ひと休みして再び山道を歩いた」とある。

### 真意楼

〔観頤荘の居宅の東南に聳えている〕

陶淵明の詩（「飲酒」第五首）に、「山のたたずまいは夕暮れ時によく、飛ぶ鳥が連なって一緒に帰ってゆく。この空間こそ真実の想いが有る。それを言い表そうとしたが、もうその言葉を忘れてしまった」とある。

真意楼の中の葛木を、「五珍」と称し、その名はそれぞれ次のようである

### 見牛木

朽ち木である。表側が牛の顔に似ているので、人間の身体と牛の頭をしていた神農氏の仁術（<sup>(17)</sup>）を見るところという意味を取って、このように名づけた。

蟠龍木  
ばんりゅうぼく

朽ち木である。その形が龍に似ているので、このように名づけた。

常山霊  
じょうざんれい

枯れた葛である。常山の蛇（訓読編の注(41)を参照）に擬えたものである。

観瀾葛  
かんらんかつ

葛藟である。連なり交錯した形が波紋に似ているので、このように名づけた。

霊洞榭  
れいどうたい

朽ち木である。中が空洞になっているので、このように名づけた。

## 真意楼の中の壁に記した「十五景」

背岳積雪  
せだけせきせつ

背振山は、辨財天の霊妙な区域である。あまたある山の中でも最もすぐれた山であり、その霊光は九州一帯を覆う。神の威光は万の幸いをもたらし、積もった雪は千年の長きにわ

たって消えることがない。それゆえここから見上げる。

温泉蒸煙  
うんせんじょうえん

温泉岳（雲仙岳）は、南のすぐれた景観である。蒸すがごとく噴煙が立ち上り、その勢いは雲夢沢を呑みこまなばかりである。峰々に煙が立ちこめており、皆が指さすところである。

多良翠霧  
たらすいむ

多良岳は、西と南の間に抜きん出ている。高く陰しく、ぼんやりと霞んでいて、霧が薄い青色の山の表に漂っているのが遠く見えるのみである。

曲江龍橋  
きやうこりゅうきやう

園の中に曲がりくねった川がある。長い橋が流れに横たわっており、臥したその形は龍に似ている。園を訪れる客人は、皆ここを通る。そこでこの景観をほめる。

平原花塙  
へいげんかお

花の咲いた堤はまるで錦を織りなしたかのようであり、原野はまるで緑を敷きつめたかのようである。この場所に遊んだならば、園の中にいることを忘れて、平原の外に出ているかのように感じる。

## 前池澄月

池は観願荘の居宅の前にある。水の清らかさは姿を映すことができるほどであり、月の清らかさは賞玩するのにふさわしい。同じ気質を持つもの同士は求め合うといういわれは、水と月がともに相照らすこの景観にこそあるのだ。

## 湾溪桃花

入江の溪流が園の中をめぐり、桃の花を咲かせた木々がその流れを挟んで立っている。青緑の霽（もや）（溪流）が紅色の雲（咲きこぼれる桃の花）の中に流れこむのが見え、この敷地の最もすぐれた景観に思える。

## 堆岩飛泉

重なった岩の間から、滝が湧き出ている。音を立てて流れ落ち、噴き出る水しぶきが周りの木々にふりかかる。風雅を好む人々はここに憩う。

## 沙場講馬

園中の小径の傍らに、平らで広い砂原がある。ここを馬を訓練する馬場とした。

## 層嶺仙径

峰は周囲をとり囲み、道は曲がりくねり、幾重にも重なった

山が青く目に映る。ここに遊べば、まるで俗世間から抜け出して、仙界に通じる道を尋ね歩くかのようなのである。

## 廻岸楓樹

曲江の岸を繞るようにして植えてあるのは、すべて楓である。園の中のすぐれた景色の一つであり、かりそめに蜀江の錦（訓読編の注103を参照）にたとえることができよう。

## 西疇觀稼

園の外に青々と茂っているのは、穀物である。西の広大な田畑を眺めて、農家の苦勞に思いをいたす。したがって興趣を覚えるより、恵みを覚える。ここに記して、忘れないようにつとめる次第である。

## 桜下金井

桜の木の下に井戸がある。しだれ桜の枝が糸のように垂れ、井戸の水にその緑が映っている。そこでこのように名づけた。

## 野渡泛舟

野に流れる川は清く浅く、渡し場があり、小舟があり、小舟は水上にゆつたりと浮かんで、まるで旅人を待つかのような。そこで雅びな興趣をこの名に託した。

## 杏院漏鐘

園の外に寺院は遠く、時刻を告げる鐘の音が聞こえ、雲に届きそうな高い木々の茂った村が見える。その興趣を惜しんで、壁に記した。

## 欲辨舍

「真意様のすぐ近くにある茅葺きの小屋である」  
陶淵明の詩（「飲酒」第五首）に、「言葉で言い表そうとしてもすでにその言葉を忘れてしまった」とある。

## 八仙堂

八仙人（鍾離・張果老・呂洞賓・李鉄拐・韓湘子・曹国舅・藍采和・何仙姑）の像を安置している。南極老人を本尊とする。  
蓬班（八仙堂の西の敷地にある小さな茶屋である。園の中を散策して

雅会を催す場所としている）

盧仝の茶歌（「走筆謝孟諫議寄新茶」）に、「蓬萊山は、どこにあるのか」とある。

## 釣詩梅

（伏すように横に伸びた梅は、形が船に似ており、蓬班のすぐ近くに横たわっている）

胡銓の詩（「和林和靖先生梅韻」第四首）に、「一年のうちでもっとも良いのは早梅の咲く時、その香りと可憐な姿が風情を引

き寄せて巧みに詩を釣る」とある。

## 龍陰堤

（堤に生えた松は、そろって青々と茂り、蓬班の前の野原にある）  
蘇軾の詩（「種松得俸字」）に、「坐して待つ、二匹の龍蛇（松の木）が、清らかな木陰を南側の階段に満たすのを」とある。

## 団香廬

（観頤荘の西南の野原に草庵が一つ結ばれており、茅葺きの屋根と門戸はいずれも丸い形をしている。そこでこのように名づけた）

梅堯臣の詩（「依韻和杜相公謝蔡君謨寄茶」）に、「団茶の香りはすでに都の役所に届いている」とある。

## 興慶墅

（観頤荘の東南に、門と垣根を隔てて、別荘を構えた）  
唐の開元年間に、興慶池の東の沈香亭の前に牡丹を種えた（訓読編の注（60）と注（61）を参照）。これに倣って牡丹を植え、別荘に興慶墅と名づけた。

## 五柳門

五本の柳を植え、小道を通して、門に興慶墅に設け、陶淵明の「五柳先生伝」に記された、家の入り口の五本の柳の名を借りた。

## 至聖殿

興慶墅の中にある。特別に一つの場所を囲っており、内外の

二重の門がある。

**声振門**〔内側の門である〕

『孟子』（万章下篇）に、「孔子が徳を集大成したというのは、音楽の演奏で喩えるなら、まず鐘を鳴らして始め、最後に玉磬を打って演奏を締めくくるようなものだ」とある。

**由道門**〔外側の門である〕

『論語』（雍也篇）に、「誰でも出て行くのに戸を通らない者がいるだろうか。どうしてこの道（道徳）を避けて通ることのできる者がいるだろうか」とある。

**芸暉閣**〔漢籍を収める書庫である。至聖殿の後ろの小道に構えてある〕

『杜陽雜編』に、「元載（唐の文人）は、書斎として芸暉堂を造った。書物に紙魚がつかないように、芸暉草を壁に塗りこめた」とある。

**随扈府**〔和書を収める書庫である。長い廊下を廻らして、漢庫（芸暉閣）に通じるようにしてある〕

「古今和歌集真名序」に、「民衆が必要とするところに随い、すぐれた才能や見識を持つ人の和歌を選びとる」とある。

**濃陰廬**〔大きな榎の樹によりかかるようにして、茅葺きの庇が設けられている。園内を散歩し、ここで休憩をとる〕

王穀の詩（「暑日題道辺樹」）に、「あたり一面に広がっている濃い木陰が、ここから前に出るのを億劫にさせる」とある。

**妙相堂**

観音像を安置している。至聖殿から離れたところに、別の敷地があるのである。

**羅漢堂**

妙相堂のすぐ近くにある。中国製の石像である。

**雲捧楼**〔観願荘の東南に聳え立つ。楼上から見える十一の景観を扁額に記した〕

に記した〕

王安石の詩（楊蟠「甘露寺」詩の誤り）に、「雲が楼台を捧げて天上に突き出させる」とある。

**雲捧楼の中の壁に記した「十一景」**

**王子瑞籬**

雲捧楼の前方、数十弓（訓読編の注(106)を参照）の距離を隔て、南東の方角に王子権現が見える。明るく輝くめでたい垣根に、いつも和やかな靈光を仰ぎみる。

## 大樋扨農

大樋村（大井樋村）は南にある。近くに農夫が田畑を耕す姿が見え、田野で手をたたいて舞い踊り、豊作を喜ぶ声が聞こえる。

## 末次杳煙

南の方向にいくばくかの距離を隔てて、末次村がある。茅葺き屋根がびっしりと連なっており、風に霏がたなびいている様子が見える。

## 八田連松

八田村は南東にあり、長い堤防に緑の木々が連なっている。青松がすつくと立ち並んでいるのが見え、春となく秋となく青々と茂っているその姿を愛する。

## 南里舞鶴

南里の村は、東と北の間にある。その土地は広々としてのどかであり、舞鶴が良きところを選んで、声を合わせて鳴き交わす。そこでこれを佳境とした。

## 徳善靈森

徳善院は、国を鎮護する社である。しかも神霊のめでたい霊験がある。だから千秋万歳にわたって仰ぎ見、神霊のや

どる森を眺める。

## 稲佐残月

稲佐山は西に聳える。有明の月を留め、暁の雲を引き寄せらる。これをもつて詩境の余情を添える。

## 寺井晴滄

寺井は東と南の間にあり、空と海が青一色をなしている。雲が晴れば青海原が果てしなく広がり、近く視界に入る。

## 早津遠帆

早津は寺井と並んでいるが、趣が異なる。雲にとどくほど高く聳える樹々の間に、遠く風に帆をふくらませた船を指さし、これを美しい景観とする。

## 藁尾夕照

藁尾山は西に聳える。夕陽が光を留め、山の景色が雲捧楼に入る。

## 阿蘇朝暉

阿蘇山は東にある。遠く肥後の国を指さして、楼上から眺めれば、土地は異なるものの興趣は同じである。遠く緑樹にかかった霏が明るく輝き、日の出をみちびく。



蕃育園〔竹の囲いを設けて、異国の珍獣を飼育し、「蕃育」の扁額を掲

げる〕

朱熹の「論語序説」に、「孔子が牧畜を掌る役人になると、家畜が繁殖した」とある。

窺牆亭〔この亭は至聖殿に隣接しているので、このように名づけたの

である〕

『論語』（子張篇）に、「先生（孔子）の扉は、数仞（訓読編の注（77）を参照）の高さがある」<sup>19</sup>とある。

鐘樓〔窺牆亭の敷地の中の樹木が深く茂った場所に在る〕

玉鈎観〔廻廊が窺牆亭に通じている〕

盧仝の詩「新月」に、「仙人の住む宮殿（月の宮殿）では雲の御簾が捲き上げられ、簾をとめる玉製の鈎（三日月）が露わになっっている」とある。

抱明榭〔玉鈎観の傍らに、月見台が築かれている。台に壁は設けてい

ない。それゆえに玉鈎観の西側の戸のすぐ近くに配置した〕

「赤壁賦」（蘇軾「前赤壁賦」）に、「明月を抱いて永遠に生き続けたものだ」<sup>20</sup>とある。

風簫檐〔窺牆亭の北側に構えられている。またこの檐の外に竹林が

有る〕

「此君軒賦」（楊万里「清虚子此君軒賦」）に、「風に竹が揺れ動き、まるで簫や瑟によつて奏でられるようなその清らかな音を聞いていると、喜びを覚えて食事のことも忘れてしまった」とある。

愛棲軒〔風簫檐の傍らに連なっている。ここには日本の鳥を棲まわせ

ている〕

劉長卿の詩（小鳥篇 上裴尹）に、「主人の庭の中は喬木に覆われており、小鳥はこの清らかな木陰を愛して、巢を懸けて住もうとする」とある。

蘇鳴〔異国の鳥を愛でる堂である。それゆえに中国の家屋の図に倣つて造つてある。折よく中国製の扁額が手に入り、それに「和鳴」

の字が書かれているので、これを掲げて建物の名とした〕

劉斌の詩（送劉散員、同賦陳思王詩、得「好鳥鳴高枝」）に、「春の林はすでに自ら好く、ほととぎすが再び声を合わせて鳴き交わしている」とある。

代璋弄〔ここには外国の遊びの道具が置いてある〕

『詩経』（小雅「斯干」）に、「男の子が生まれたら、璋（玉製の小さな板）を与えて遊ばせる」とある。この亭には異国より伝来した弾丸がある。璋を弄ぶの意味をとつてこれに代

え、亭の名とした。

うずたかく積まれた経書や史書を読む者は、その要点を提示する。繁った園林を通る者は、その香りを拾う。観頤荘は、佐賀城の西にある別荘である。園林は必ずしも大きくはなく、建物も必ずしも華美ではない。山水を愛<sup>め</sup>でるものの山水だけに止まらず、花や木を賞玩するもののそれだけに偏らない。心のおもむくままに詩を吟じ、心を涵養しながらこれらを観察する。園の中を日々自由気ままに散策しているうちに書き記したものが一巻をなした。ああ、乏しい才能をかき集め、つまらない言葉を並べたので、<sup>にわるし</sup>楞<sup>くわう</sup>や<sup>くぬぎ</sup>櫟<sup>れき</sup>や散木<sup>さんぼく</sup>など役に立たない木が巨大であるようなものであり、また<sup>いばら</sup>荊<sup>けい</sup>が茂っているようなものである。長大な一巻をなしたものの、開けば見るに疲れ、読む者を苦しめ、吟ずる者を戸惑わせるだろう。そこで題目を集め、小さな附録をつけた。風雅を愛する人たちがこれを鑑賞して詠じ、潤色することによって、藝術に心を涵養し、<sup>よく</sup>歆<sup>きん</sup>びの声を庭園に添えんことを願う。

元禄十五年十一月某日

肥前侯拾遺補闕 藤貞伯固

致徳斎主人が景観を選んで自ら記した

印記(なし)

【注】

- (1) 事物の道理をきわめ、知的判断力を高める意で、朱子学では理想的な政治を行うための基本的条件とされた。
- (2) 天下古今に通じて行われるべき道。五倫(父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信)の道。
- (3) 天下古今の人が常にふみ行うべき徳。知・仁・勇の三つ。
- (4) 陶泓は硯の異名。陶は陶器、泓は硯の水を貯えるところをいう。
- (5) 陳玄は墨の異名。古くて黒いことからいう。
- (6) 毛穎子は筆の異名。毛錐子ともいう。穎は尖の意。
- (7) 『論語』に「仁者は山を楽しむ、智者は水を楽しむ」とあるのを踏まえる。
- (8) 楮国公は紙の異名。唐の薛稷が紙を作って楮国公になったことからいう。
- (9) 『詩経』大雅・卷阿に「鳳凰鳴けり、彼の<sup>か</sup>高き岡に」とあるのを踏まえた表現。
- (10) 東晋の名臣謝玄が幼い頃、叔父の謝安に将来の夢を尋ねられ、芝蘭や玉樹を家の庭の階段に生えさせたいと答えた故事に由来する言葉。詳しくは訓読編の注(33)を参照。
- (11) 白居易の詩句とされているが、実は唐・錢起の「藍田溪雜詠十二首・古藤」に見える句である。
- (12) 実に何とも言えない満ち足りた心境であることをいう。
- (13) 訓読編の注(40)と現代語訳編の注(17)を参照。
- (14) まず『孟子』の次の言葉を踏まえていよう。「海を<sup>み</sup>観る者は(天下の水を)水となし難く、聖人の門に遊ぶ者は(天下の言を)<sup>げん</sup>言と

なし難し。水を観るに術あり、必ず其の瀾を觀よ。」水の大小を見分ける方法は、その波の立ち方を見るべきであるという。波の立ち方の大小は、必ず水の大小に比例するからである。そして『孟子注疏』は孟子のこの言葉を次のように解釈している。「人が書物を読むのもこれと同じである。つまり書物を読むなら五経を読むべきである。五経は聖人の大いなる道を載せた書物だからである。」物事の本来を悟ることができるというのは、このことを指しているのではないだろうか。原文は訓読編の注(42)を参照。

(15) 二十九字×二十九字の文字を錦に織り込んだもの。錦に織り込まれた文字は、縦横それぞれどこからも自由に読んでいくことができ、三言・四言・五言・六言・七言の詩が計三千七百五十二言判読できたという。回文詩の始まりとされる。

(16) 張騫の乗槎伝説を踏まえる。前漢の外交官であった張騫は、武帝から黄河の源を探ってくるように命じられ、いかだに乗って出発し、あるところにたどりついたが、そこには織女と牽牛がおり、天の河であつたという伝説。詳しくは訓読編の注(47)を参照。

(17) 神農は中国古代の三皇の一人。牛頭人身の炎帝のことで、民衆に農業を教えたとされる。農耕神と医薬神の性格をもち、百草の性質を調べるために自ら嘗めたと伝えられる。仁術は仁徳を他に施す方法。また、特に医術をいう。

(18) 中国古代に湖北省から湖南省にかけて存在したという大湿地。長江中流の武漢附近の湖沼群はその跡といわれる。

(19) 『論語』子張篇には、「叔孫武叔語大夫於朝曰、子貢賢於仲尼。子服景伯以告子貢。子貢曰、譬諸宮牆也、賜之牆也及肩、闕見室家之好。夫子之牆也數仞、不得其門而入者、不見宗廟之美百官之富、得其門者或寡矣。夫子之云、不亦宜乎」とある。大意を示すと、叔孫武叔が朝廷において、子貢は孔子よりも賢いと言った。それを伝え聞いた子貢は、屋敷の塀の喩えを用いて、自身が肩ほ

どの高さの塀だとすれば、その内側をのぞき見ることができる。しかし孔子は五、六仞(約七・五メートル)の塀であり、その内側の宗廟の美しさや百官が盛んに立ち並ぶさまは窺い知ることができないと答えたというものである。

(20) 蘇軾「前赤壁賦」には、「挾飛仙以遨遊、抱明月而長終、知不可乎驟得、托遺響於悲風」とあり、空を飛ぶ仙人と一緒に遨遊し、明月を抱いて永遠に生き続けることは、すぐにはかなえられないと知っているので、洞簫の音色の余韻を秋風に托すほかないという意味で用いられている。



## 著者紹介

### 中尾 友香梨（なかお・ゆかり）

現職 佐賀大学文化教育学部准教授

主要なる関連論著 『江戸文人と明清楽』（単著、汲古書院、2010年）、『歴史に埋もれた名医―徳永雨卿』（佐賀大学地域学歴史文化研究センター、2011年）、『江戸中期の名医・徳永雨卿』（佐賀大学・佐賀学創成プロジェクト編『佐賀学』、花乱社、2011年）、『文人大名鍋島直條の詩箋巻』（共著、佐賀大学地域学歴史文化研究センター、2014年）、『文人大名―鍋島直條』（佐賀大学・地域学創成プロジェクト編『佐賀学Ⅱ』、岩田書院、2014年）、『肥前鹿島藩第四代藩主・鍋島直條と詞』（『風絮』第12号、日本詞曲学会、2015年）、『来日明人任元衡より鹿島藩主鍋島直條に贈られた填詞作品』（『研究紀要』第10号、佐賀大学地域歴史文化研究センター、2016年）など。

佐賀藩第三代藩主

鍋島綱茂の文芸

―『観願莊記』を読む

平成二十八年（二〇一六）三月三十一日

編著 中尾友香梨

発行 佐賀大学地域学歴史文化研究センター

〒八四〇―八五〇二 佐賀市本庄町一番地

電話 ○九五二―二八―八三七八

印刷 大同印刷株式会社

〒八四九―〇九〇二

佐賀市久保泉町大字上和泉一八四八―二〇

電話 ○九五二―七一一八五二〇（代）

義

卷



拾

編